



都市文化研究センターの活動

榮原 永遠男

記載の範囲

本号には、平成16年1月下旬から6月30日までの事態を記録する。ただし、「平成16年度予算案および事業計画」「中間評価」「重点研究」の各項については、それ以前の事実も記録することとする。

平成16年度予算案および事業計画

- ①平成15年12月10日付けの文部科学省からの事務連絡にもとづき、平成16年1月6日までに「平成16年度21世紀COEプログラム研究拠点形成費調書」を作成した。
- ②3月1日付けで、平成16年度補助金の公布内定の通知があった。
- ③4月12日付けで「平成16年度研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）交付請求書」を作成して提出した。
- ④2月27日締切で、平成16年度の事業計画書22件の提出を受けた。事務局にて、16年度公布予定額や重点研究として推進しうる部分を勘案して、各事業ごとの執行予定額案を作成した。これは、3月22日の第22回センター会議で、修正の上承認された。

平成15年度の総括および決算

- ①各事業ごとに平成15年度成果報告書の提出を受けた（3月10日締切）。
- ②事業推進担当者、事業推進協力者の平成15年度業績一覧の提出を受けた（3月10日締切）。
- ③4月22日付けで「平成15年度研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）実績報告書（収支決算報告書）」および「同（研究拠点形成実績報告書）」を作成・提出した。

都市文化研究センターの設置承認

- ①都市文化研究センターは、平成14年11月1日の文学研究科教授会で「都市文化研究センター規程」を制定するとともに設立された。その後、11月11日の部局長会において、センターの設置とセンター規程とが承認された。

②平成16年5月10日付けで、文学研究科長と理学研究科長の連名で、学長に対してつぎの文書が提出された（文学研究科に関わる部分のみ抜粋）。

21世紀COEプログラム推進のための研究拠点の設置について

昨年度の21世紀COEプログラムにおいて、文学研究科においては「都市文化創造のための人文科学的研究」が採択されました。文学研究科では研究科内に、研究拠点「都市文化研究センター」を設置し、研究プログラム／プロジェクトを推進しております。

この「都市文化研究センター」では、三つの研究教育チーム、A：比較都市文化史研究、B：現代都市文化研究、C：都市の人間研究を設け、学术交流協定を締結した諸大学の研究者と協力して、都市に蓄積されてきた文化的伝統を歴史的に解明する基礎研究を踏まえ、都市文化の現状解明や、現代都市の諸問題への実践的な取り組みを唱道する研究を行っています。

各チームは研究機能とともに教育機能を有し、将来この分野の研究を担い、本拠点の研究を継続しうる若手研究者を育成しています。

（中略）

これらの研究拠点、文学研究科に設置しております「都市文化研究センター」及び、理学研究科に設置しております「数学研究所」につきまして、本学としてその設置について承認をお願いします。

なお、両拠点についての運営・管理については各研究科での対応とします。

- ③この申し入れは、5月10日の部局長会、5月17日の評議会で承認された。また、そのことは、5月21日の文学研究科教授会で報告され、了承された。

中間評価

- ①平成15年11月21日付けで、21世紀COEプログラム委員会から「21世紀COEプログラム」評価要項」が発表された。
- ②平成15年12月17日付けで文部科学省高等教育局からの「21世紀COEプログラム」平成14年度採択の研究教育拠点の中間評価の実施について（通知）」にもとづいて準備に入った。書類提出締め切りは、学内は1月6日、日本学術振興会は平成16年1月16日であった。
- ③②の通知にしたがって、「21世紀COEプロ

グラム」(平成14年度採択)進捗状況報告書(中間評価用)、「同拠点形成計画調書(中間評価用)」、「同提出カード」、「同拠点組織表」を作成し、事務局学術交流課と調整の上、提出した。

④平成16年3月22日付けで、21世紀COEプログラム委員会から「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択)研究教育拠点の中間評価ヒヤリングの実施について(通知)の連絡があった。これによると、中間評価ヒヤリングの日時は5月19日(水)午前11時10分~40分、場所は独立行政法人日本学術振興会一番町第2事務室(一番町FSビル)である。

⑤④の通知にしたがって、学内締切4月19日(日本学術振興会締切4月23日)の「出席者名簿」を提出した。出席予定者は、阪口弘之拠点リーダーと、COE事務局から栄原常任委員長、井上浩一事務局員の3名とした。

⑥④の通知にしたがって、つぎの資料を作成した(これらはヒヤリング当日持参)。

- a. 説明資料②「拠点リーダーが、このプログラム(拠点形成)において、最もアピールできる点は何か。このうち、1点だけあげて説明するペーパー」
- b. 説明資料③「21世紀COEプログラム拠点形成計画調書(中間評価用)」の項目8「大学院学生に対する教育の状況」に関する最新のデータのペーパー」
- c. 「別途、必要に応じて追加の説明資料」
- d. 拠点リーダーによる「拠点形成進捗状況等の説明」の文案

さらに、事務局学術交流課分担のつぎの資料の作成を補助した。

- e. 説明資料①「学長がこの拠点形成にあたり、どのような観点を意識して、重点的支援を行ってきたのか、についてのまとめペーパー」このうち c は、d の内容にあわせて用意した。文書とパワーポイント画面からなる。

[文書 カラー印刷]

1. 拠点リーダーの説明の概要
2. 都市文化研究センターの概要
3. 若手研究者の学位取得人数
4. 都市文化研究センター刊行物一覧とその写真

[パワーポイント画面]

1. 表紙
2. 三つの研究教育チームと研究テーマ
3. 都市文化研究センター 海外拠点(サブセンター)の組織図
4. 学位取得者数
5. 都市文化研究センターの活動
6. 都市文化研究センター 刊行物

7. 都市文化研究センターの研究サイクル

⑦5月19日に、指定の日時・場所でヒヤリングを受けた。

⑧21世紀COEプログラム委員会(人文科学)評価部事務局から、6月7日および6月11日付けで、8月31日(火)に約1時間程度の再ヒヤリングを実施する旨の連絡を受けた。

事業推進担当者の交代

小林道夫教授、森田洋司教授、三浦國雄教授にかわって、中才敏郎教授(哲学)、石田佐恵子助教授(社会学)、松村國隆教授(ドイツ語ドイツ文学)の3名があらたに事業推進担当者となった。

COE研究員

[平成15年度COE研究員]

①2月27日締切で研究成果報告書、会計報告書の提出を受けた。

[平成16年度募集と選定]

②平成16年度COE研究員の選定にあたって、つぎの原則を確認した。

- ・平成15年度COE研究員を自動的に継続することはない。
- ・COE研究員は事務助手的性格のものではない。
- ・学位論文の作成の見込みを優先する。ただし、これを絶対条件とはしない。
- ・研究テーマのCOE事業との適合性を重視する。
- ・指導教員の推薦を必要とする。
- ・各専修の推薦枠に基準を設ける。
- ・採否はセンター会議で決定する。

③2月2日付けで募集要項を文書で配布し、HP上で公募を開始した。締め切りは2月27日である。

④在籍博士課程大学院学生数にもとづいて、専修別推薦基準数を決め、選定の参考資料とした。

⑤応募者は35名(うち学外2名)であった。

⑥3月18日の第19回常任委員会および3月22日の第22回センター会議で29名の採用を決定した。ただし学術振興会特別研究員2名には研究費の支給を行わない。

⑦4月6日に説明会を開催した。栄原常任委員長と西山学務係長が対応した。COE事業の趣旨、研究の進め方、研究費の使用等について説明し、質疑応答した。

⑧4月14日の第23回センター会議で1名の追加採用を決定した。これにより、今年度のCOE研究員は30名で確定した。

COE特別研究員および博士研究員

①3月9日の第21回センター会議にて、昨年度COE研究員および博士研究員であって博士の学位を取得したものは11名であること、平成15年度博士研究員であったものおよび平成16年度学術振興会特別研究員の予定の者については研究費を支給しないこと、平成16年度は大阪市立大学に対して博士研究員の採用を申請しないことを確認した。

②3月18日の第19回常任委員会および3月22日の第22回センター会議で、COE特別研究員10名の採用を決定した（採用予定者のうち1名は就職内定）。

北京サブセンターの開設

①4月28日付けで下記の学術交流協定が締結された。これは、5月21日の評議会です承された。

中国社会科学院歴史研究所・大阪市立大学大学院文学研究科学術交流協定

中国社会科学院歴史研究所と大阪市立大学大学院文学研究科は双方の教育及び学術研究上の協力関係を推進するために、特に学術交流に関して、以下の合意に達した。

第一条 中国社会科学院歴史研究所と大阪市立大学大学院文学研究科は、双方の教育及び学術研究事業を促進発展させるために、双方の専門範囲内で、以下の形式の交流活動を行うことに同意する。

1. 専門問題の共同研究、協力授業、学術討論会などの活動を行い、あわせてこれと関連する学者の交流を実施する。
2. 双方が関心を有する学術領域で、資料と情報を交換する。
3. 研究生院（大学院）博士生を中心とする交流を推進する。

第二条 この協定書を基礎に、交流を実施する際には、あらゆる具体的項目及び具体的事務に関して、双方の責任者が別途取り決めを行う。

第三条 本協定書を実施する過程で、双方は随時意見交換を行い、双方が一致を見れば、協定書に対して調整を行う。

第四条 本協定書は双方署名の日を以て発効し、有効期限は三年とする。満期後、双方の協議のうえ合意あれば継続を可とする。いずれか一方が本合意を終了する際には、六か月以前に文書を以て他方に通知する。

第五条 本協定書は、漢字文とする。

中国社会科学院歴史研究所
所長 陳祖武
二〇〇四年四月廿八日

大阪市立大学大学院文学研究科
科長 中村圭爾
二〇〇四年四月廿八日

（本学術協定は、第五条にあるように、中国語の文書を正文としている。以上の日本語は、6月16日の国際学術交流委員会において承認されたものである。）

②これにもとづき、中国社会科学院歴史研究所内に北京サブセンターが開設された。それにともない、設備・備品等の充実を図っている。また、HPを立ち上げる予定で、その準備に取りかかった。

重点研究

①「大阪市立大学重点研究」は、大阪市立大学独自に、国際レベルでの卓越した研究教育拠点を形成することを目的とするものである。文学研究科は、COEと連携しつつ、これを支援することを柱とする研究計画を立てて応募することとなった。このため「重点研究」の経過をここに記しておく。

②平成15年10月22日以降、計4回の重点研究検討委員会（メンバーは研究科長、両評議員、教務委員長、予算委員長、庶務委員長、COE常任委員および事務局員）で、計画の骨子を決め、それにもとづいて申請書案を作成した。

③11月7日の研究科教授会で、平成15年度申請の研究計画案が承認された。

④11月21日に「平成15年度重点研究申請書」および「研究担当者個人調書」を事務局学術交流課に提出した。研究プログラムの名称「都市文化創造のための比較史的研究」、研究代表者塚田孝教授、平成15～19年度の5年間、研究担当者11名。

⑤12月25日、重点研究運営委員会より採択の通知があった。以後「重点研究運営会議」として運営する。

⑥平成16年度重点研究の申請については、1月23日の研究科教授会で重点研究検討委員会に検討が付託された。これにもとづき、2月6日（金）に同委員会が開催され、検討した。

⑦4月7日の第4回運営会議において、COE事業のうち重点研究として推進しうる部分を検討して確認した。

また、今後の重点研究の進め方に関する基本的な考え方として、次のような柱で考えていくこととなった。

- (a)年2回程度のシンポジウムを軸とする研究推進
- (b)基盤整備

- ・大阪都市文庫の充実（自治体史，文献目録，近世史料，日本経済史資料，大阪町触）
- ・史料収集・整理

⑧2月15日（日）に第1回重点研究シンポジウムを開催した。

「難波宮から大坂へ——上町台地の新しい歴史像をさぐる——」10時～18時30分

1号館3階 特別会議室

挨拶：中村圭爾（大阪市立大学大学院文学研究科長）

司会：塚田孝（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

古代大阪の都市的環境

積山洋（財団法人大阪市文化財協会会長原調査事務所長）

「前期難波宮と京建設」

栄原永遠男（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

「後期難波宮の性格」

竹本晃（大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程学生）

「大阪の古代氏族」

田中大介（大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程学生）

「難波の市」

榎村寛之（斎宮歴史博物館主査）

「古代都市難波と祭礼」

中世上町台地の歴史環境——四天王寺・渡辺・大坂——

松尾信裕（財団法人大阪市文化財協会調査員）

「考古資料に見る町と村——四天王寺から大坂へ——」

大澤研一（大阪歴史博物館学芸員）

「聖地としての上町台地——寺社の信仰と機能——」

古野貢（豊中市教育委員会嘱託）

「摂津・和泉守護細川氏による流通・都市の把握」

天野忠幸（大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程学生）

「大阪湾岸都市と三好政権」

仁木宏（大阪市立大学大学院文学研究科助教授）

「戦国時代摂津・河内の都市と交通——中核都市・大坂論——」

パネルディスカッション

以上の内容は，3月31日付けで大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターから同名で刊行された。

⑨3月10日（水）に第2回重点研究シンポジウムを開催した。

13時～17時 法学部棟6階第2会議室

陳力（阪南大学国際コミュニケーション学部助教授）

「先秦秦漢時期関中中部地区の都市——出土資料と衛星写真を中心に——」

楊振紅（中国社会科学院歴史研究所副研究員・COE研究員）

「秦漢時期城市史研究資料述略」

中村圭爾（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

「六朝都城史料の内容と視点」

平田茂樹（大阪市立大学大学院文学研究科助教授）

「宋代政治史史料と都市研究」

韓茂莉（北京大学城市与环境学系教授）

「北京歴史地図集与地図集編輯」

以上の内容は，大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターから刊行する予定で準備中である。

⑩関係会議の日程

〔重点研究検討委員会〕

第1回 平成15年10月22日（水）9時30分～10時30分

第2回 10月29日（水）10時～11時30分

第3回 11月7日（金）10時～11時

第4回 11月19日（水）9時30分～10時30分

第5回 平成16年2月6日（金）10時～11時

以上，いずれも文学研究科長室

〔重点研究運営会議〕

準備会 平成15年11月5日（水）16時20分～18時

第1回 平成16年1月9日（金）教授会終了後

第2回 2月6日（金）教授会終了後

以上，文学研究科長室

第3回 3月10日（水）17時30分～19時

第4回 4月7日（水）10時～11時20分

第5回 5月12日（水）16時30分～17時30分

第6回 6月9日（水）16時30分～17時30分

第7回 6月30日（水）16時30分～17時30分

以上，COE会議室

COE事務局の活動

①4月12日より荒平みほさんがCOE事務室で勤務についた。勤務は月～金，9時～17時15分である。宮崎幸子さんは4月末日で退職した。

②出口智美さんの席は文学研究科事務室である。勤務条件は荒平さんと同じ。坂本美加さんの出勤日は原則として水，金，勤務場所はCOE事務室，勤務時間は10時～18時である。

③4月から，教員のCOE事務局員として土屋礼子助教授（社会学）に参加していただくこととなった。栄原（日本史学），井上浩一教授（西洋史学），三上雅子助教授（表現文化学），田中

一彦助教授（言語情報学）は継続。

④事業推進担当者、同協力者、COE特別研究員、COE研究員の身分証を発行した。

⑤来日した外国人COE研究員、招聘研究者（文学研究科客員研究員）の研究室の確保およびそこでの研究環境の整備（IT環境等）を行なった。ゲストハウス宿泊、学術情報総合センター利用者カードの発行の手配をした。

⑥『都市文化研究』3号、『都市とフィクション』『都市の異文化交流』『歴史遺産と都市文化創造』『せん年より御ふれふみ』『魏晋南北朝都城史料輯佚』『難波宮から大坂へ』『中国的現代性と都市知識分子』『What's happening on the street?』『Urban Culture Research 1』を配布・発送した。

⑦図書管理体制を改善した。

⑧COE事務室のIT環境の整備を進めた。また、関係書類の整理、FDの整理、備品の整備等、事務環境の改善に努めた。

常任委員会・センター会議の開催

〔常任委員会〕

第18回 2月26日（木）15時～17時10分

第19回 3月18日（木）12時30分～14時

第20回 6月18日（金）16時～18時

〔センター会議〕

第20回

2月12日（木）9時30分～11時

第21回 3月9日（火）10時～12時

第22回 3月22日（月）9時～11時

第23回 4月14日（水）10時～12時

第24回 6月2日（水）10時～12時

第25回 6月30日（水）10時～12時

以上、いずれも開催場所は文学研究科長室

Aチーム「比較都市文化史研究」の活動

栄原 永遠男

Aチーム運営委員会の開催

第20回 1月31日（土）11時～12時30分

第21回 2月22日（日）10時～12時

第22回 3月19日（金）11時～12時20分

第23回 4月24日（土）11時～12時35分

第24回 5月26日（水）11時40分～12時20分

第25回 6月26日（土）13時～14時10分

構成員

平成16年度のAチームの構成員は次の通りである。

る。

〔事業推進担当者〕

栄原永遠男（Aチーム担当副リーダー）、塚田孝、仁木宏（以上、日本史学）、中村圭爾（東洋史学）、井上浩一（西洋史学）（5名）

〔事業推進協力者〕

広川禎秀、岸本直文（以上、日本史学）、井上徹、平田茂樹（以上、東洋史学）、中野耕太郎（西洋史学）、小林直樹（国語国文学）、大岩本幸次（中国語中国文学）（7名）

〔COE特別研究員〕

大村拓生（日本史学専修）（1名）

〔COE研究員〕

後藤真、島田克彦、中林隆之、古野貢、村井良介、山下聡一（以上、日本史学専修）、山崎覚士（東洋史学専修）、図師宣忠（西洋史学専修）（8名）

事業計画と推進状況

本チームは六つの事業計画を設定した。それぞれの計画内容と本期における事業推進状況は次の通りである。（ ）内は責任者。

(1) 「（平成15、16年度）Aチーム（比較都市文化史研究）研究会」（井上浩一）

①月例研究会を中心とし、海外研究者を招いて適宜シンポジウムを開催する。

②研究会及びシンポジウム開催の実施状況は後述する。

(2) 「（平成15年度）都市文化創造において歴史的都市の文化伝統が果たす役割に関する比較研究」「（平成16年度）歴史遺産と都市文化創造」（井上浩一）

①平成16年度は、アジア地域を中心とし、かつ都市文化創造の拠点としての博物館に焦点を当てる。大阪、上海、釜山、バンコクを予定。そのほか、琉球、シンガポールについてコメントを求める予定。

②大阪、上海については、大阪歴史博物館と協力して準備中である。また、COE研究員の山崎覚士氏（東洋史学専修）に参加を求める予定。

③平成16年11月にシンポジウムを開催する。

④シンポジウム等の成果は、報告書として刊行する予定である。

(3) 「（平成15、16年度）前近代の日本と中国における都市の比較史的研究——北京サブセンターを拠点とした日中研究交流——」（中村圭爾）

- ①文学研究科と中国社会科学院歴史研究所との間で、学術交流協定が結ばれた（都市文化研究センターニュースの項参照）。本年度以降、これにもとづいて、共同研究を実施する。
- ②歴史研究所にサブセンターを設置した。今後、設備機材の整備をはかる。
- ③中村圭爾編『魏晋南北朝都城史料輯佚——洛陽・鄴・建康篇——』（171ページ）を平成16年3月に刊行した。

(4)「(平成15年度)近世近代大阪関係都市史料の蒐集」(平成16年度は大阪市立大学重点研究として継続)(塚田孝)

- ①塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』(山川出版社,平成16年3月 A5版595ページ)を刊行した。
はしがき 塚田孝(大阪市立大学大学院文学研究科教授)

I 難波宮

都市史から見た難波宮・難波京研究の展望

古市晃(大阪歴史博物館学芸員)

孝徳朝難波宮と仏教世界——前期難波宮内裏八角殿院を中心に——

古市晃

孝徳朝の難波宮と造都構想

積山洋(財団法人大阪市文化財協会会長原調査事務所長)

II 大坂から大阪へ

十七世紀における都市大坂の開発と町人
塚田孝

1 都市内地域

近世天満青物市場の構造と展開

八木滋(大阪歴史博物館学芸員)

木村兼葭堂と北堀江五丁目——近世大坂の都市社会構造との関連で——

塚田孝

用達・館入与力・名代——摂河播三カ国の所領支配と都市的存在——

熊谷光子

一橋領知上方支配と川口役所

町田哲(日本学術振興会特別研究員, COE研究員)

明治期大阪の巨大工場と都市社会——造幣局を素材に——

佐賀朝(桃山学院大学経済学部助教授)

米騒動と都市地域社会——大阪市北区上福島聯合区を素材に——

島田克彦(尼崎市立地域研究史料

館嘱託)

2 職分と仲間

宝暦期における三井呉服店の大坂進出と大坂呉服商の対応

井戸田史子(関西学院大学図書館古文書室職員)

大坂の唐葉問屋の組織と機構について
渡辺祥子(COE研究員)

近世大坂の仲仕と仲間

森下徹(山口大学教育学部助教授)

近世大坂の酒造働人口入屋仲間と都市社会

屋久健二(大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程学生)

近代大阪の消防職員——特設消防成立期に焦点をあてて——

飯田直樹(大阪歴史博物館学芸員)

あとがき 塚田孝

- ②『せん年より御ふれふみ——近世大坂町触関係史料——』(B5版339ページ)を平成16年3月に刊行した。

(5)「大阪関係古文書の写真版による収集」(平成16年度は大阪市立大学重点研究として継続)(仁木宏)

- ①東京大学史料編纂所所蔵の大阪関係古文書の写真版に関するデータベースを完成し、ホームページへの掲載を準備している。

研究会

事業計画(1)「Aチーム(比較都市文化史研究)研究会」は、(2)以下のプロジェクトとも密接な関係を保ち、日常的に比較都市文化史を考察する場として重要な位置を占めている。

第17回研究会

平成16年1月31日(土)13時30分~17時

法学部棟11階711C教室

テーマ:3月シンポジウム準備書評会

塚田孝(大阪市立大学大学院文学研究科教授)

- ・吉田伸之「巨大城下町——江戸」(『巨大城下町江戸の分節構造』山川出版社,2000年)
- ・同「江戸の普及」(『身分的周縁と社会=文化構造』部落問題研究所,2003年)

井上徹(大阪市立大学大学院文学研究科教授)

- ・岸本美緒「明末清初の地方社会と『世論』——松江府を中心とする素描——」(『歴史学研究』573号,1987年)
- ・同「明清時代の身分感覚」(『明清時代史の基本問題』汲古書院,1997年)

町田哲（日本学術振興会特別研究員）
 ・塚田孝「アジアにおける良と賤——牛皮流通を手掛かりとして——」（『近世身分制と周縁社会』東京大学出版会，1997年）
 ・同「近世大坂の都市社会と文化」（『アジア都市文化学の可能性』清文堂，2003年）

第18回研究会

平成16年2月22日（日）13時～17時

法学部棟11階711C教室

- (1)COE研究員座談会「研究員としての2ヶ年をふり返って」 司会：仁木宏
 報告：遠藤慶太，大村拓生，渡辺祥子，森下徹，図師宣忠，の各COE研究員
 (2)楊振紅（中国社会科学院歴史研究所副研究員・COE研究員）の研究報告
 「周秦漢時代の住宅制度について」

第19回研究会

平成16年3月20日(土)～21日(日)

学術情報総合センター10階 大会議室

国際シンポジウム「東アジア近世都市における社会的結合——諸身分・諸階層の存在形態——」

（主催 大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター）

3月20日(土)（13時～17時30分）

《第一部 諸身分・諸階層の社会的結合という視角》

岸本美緒（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

「明末の都市雑業層と身分問題」

吉田伸之（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

「近世前期，江戸町人地・内・地域の分節構造」

塚田孝（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

「近世後期大坂における都市下層民衆の生活世界」

討論

レセプション（18時～20時）

3月21日（日）（9時～17時30分）

《第二部 比較史から諸歴史社会に迫る》

井上徹（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

「郷紳をめぐる諸関係と宗族の実像——明末広州府を対象として——」

金炫榮（韓国国史編纂委員会研究員）

「近世朝鮮の地方都市＝邑治の景観と社会的結合」

ギョーム・カレ（フランス国立社会科学高等研究院助教授）

「役の周縁——金沢銀座の従業員について——」

昼休み（12時～13時）

定宜庄（中国社会科学院歴史研究所研究員）

「清代北京城内の八旗鰥夫」

佐賀朝（桃山学院大学経済学部助教授）

「近世近代移行期における大阪の都市下層社会——長町の民衆世界とその構造——」

コメント1 大黒俊二（大阪市立大学大学院文学研究科教授）——イタリア史の立場から

コメント2 脇村孝平（大阪市立大学大学院経済学研究科教授）——インド史の立場から

討論

司会 岩井茂樹（京都大学人文科学研究所教授）

森下徹（山口大学教育学部助教授）

第20回研究会

平成16年4月24日（土）13時30分～16時

経済学部棟2階第4会議室

山崎覚士（COE研究員・東洋史学専修）

「中国沿岸都市の調査報告」

山下聡一（COE研究員・日本史学専修）

「三田尻塩田の社会構造」

中林隆之（COE研究員・日本史学専修）

「悔過と王権——神仏習合と悔過——」

第21回研究会

平成16年5月26日（水）9時～11時30分

経済学部棟2階第4会議室

後藤真（COE研究員・日本学術振興会特別研究員・日本史学専修）

「都市の歴史情報集積の意義と課題——日本古代史料を素材に——」

島田克彦（COE研究員・日本史学専修）

「都市大阪における米騒動と行政」

第22回研究会

平成16年6月26日（土）14時30分～17時30分

経済研究所棟521教室

古野貢（COE研究員・日本史学）

「中世後期畿内沿岸都市の政治的位置」

図師宣忠（COE研究員・西洋史学〔京都大学〕）

「異端審問における調査と〈真実〉」

国際交流

(1) 海外派遣

- ①平田茂樹氏（大阪市立大学大学院文学研究科

助教授COE事業推進協力者)は、2月19日から3月7日まで、北京、杭州、上海に出張した。北京大学、北京師範大学、上海師範大学、浙江大学を訪問して関係の研究者と交流するとともに、杭州では南宋の遺跡を見学した。

②山崎覚士氏(COE研究員・東洋史学専修)は、平成15年9月2日以来、華東師範大学(上海)に派遣されていたが、本年2月28日に帰国した。また引き続き、3月8日から25日までの期間、中国に派遣され、北京、天津において都市の景観を調査した。

③仁木宏氏(大阪市立大学大学院文学研究科助教授)は、3月9日から25日まで南イタリアに派遣された。パレルモ、カタニーヤ、ラゲーザ、プリンディシ、バーリ、ターラント、メルフィ、ミラノなどの諸都市を訪問し、古代中世都市の比較調査を実施した。

(2) 研究者招聘

①昨年未、COE研究員として受け入れた揚振紅氏(中国社会科学院歴史研究所副研究員)は引き続き共同研究を実施した後、予定通り、3月31日に帰国した。

②韓茂莉氏(北京大學城市与環境学系教授)を招聘した(3月6日~13日)。研究テーマは「比較都市文化史研究」である。

③国際シンポジウム「東アジア近世都市における社会的結合」(前掲)を開催するために、つぎの4氏を招聘した。

ギョーム・カレ(3月16日~23日)

金炫榮(3月19日~23日)

定宜庄(3月17日~23日)

陳祖武(中国社会科学院歴史研究所所長・研究員、3月19日~26日)

Bチーム「現代都市文化研究」の活動

山野 正彦

前号所載の平成16年2月以降のBチーム研究報告は以下のとおりである。

(1) メンバーの追加と移動

事業推進担当者であった森田洋司教授は平成16年3月に退職した。これに伴い16年4月以降、これまで森田を中心に行われてきた華東師範大学との共同研究は、Bチーム関係では水内俊雄教授・中生勝美助教授(法政学院と連携)と添田晴雄助教授・木原俊行助教授(教育科学学院

と連携)の2チームが中心になって進める体制に変わった。また平成16年4月から新たに石田佐恵子助教授がCOE事業推進担当者となった。同じく4月から岸政彦、二階堂裕子、松永寛明(以上、社会学専修)、西部均(地理学専修)の4名がCOE特別研究員となった。またCOE研究員に、大倉祐二、高畑幸、堤圭史郎、山口智(以上、社会学専修)、神田孝治、原口剛(地理学専修)、桑原瑞来(アジア都市文化専攻)の7名が選任された。

(2) 研究会・講演会の開催

平成16年6月末までに開催された研究会(講演会)は下記のとおりである。

第20回研究会(運営委員会)

日時:平成16年2月17日(火) 11:00~12:20
平成16年度事業計画案、COE研究員の申請等についての審議

第21回研究会

日時:平成16年2月27日(金) 13:30~15:00
報告:パタラワディ・プチャダピロム(チュラロンコン大学芸術学部) "The Transformation of Thai Entertainment Culture"

第22回研究会

日時:平成16年3月17日(水) 13:00~15:30
報告:サイラル・アリミィ(ガジャマダ大学人文学部) "Contested Wisdom in Japanese and Indonesian Proverbs: A Linguistic-Cultural Mapping"
バナソピット・メクヴィチャイ(チュラロンコン大学都市設計建築学研究所長)
"Measuring Livable City in the Thai Context"

第23回研究会(空間論研究会と共催)

日時:平成16年3月23日(火) 15:30~19:00
ロッジ舞州(大阪市此花区)
原口剛(COE研究員)

「天王寺公園青空カラオケ強制撤去問題報告および天王寺公園有料化の背景」

水内俊雄(大阪市立大学・COE事業推進担当者)

「東アジア都市の路上を考える、ホームレス対策と路上管理and/or 路上開放」

3月24日(水) 9:30~16:00

加藤政洋（流通科学大学・大阪市立大学
非常勤講師）・大城直樹（神戸大学）
「『ポストモダン地理学』から『第三空
間』へ」
吉見俊哉（東京大学）
「コメント・『ポストモダン地理学』の
書評も含めて」
吉原直樹（東北大学）「空間論研究会の
ミッション」
毛利嘉孝（九州大学）「要塞化する街路：
9.11以降の空間管理と対抗的文化実
践」
若林幹夫（筑波大学）「浮上するエコロ
ジー——環境の近代とその環境」

第24回研究会（運営委員会）

日時：平成16年4月28日（水）10：00～11：45
平成16年度事業実施計画について審議

第25回研究会

日時：平成16年5月19日（水）13：00～14：30
堤圭史郎（COE研究員）
「仮設一時避難所入居者ケース分析・
中間報告」
原口剛（COE研究員）「現代都市におけ
る公共空間の位相——天王寺公園青空
カラオケ強制撤去問題を事例として」

第26回研究会

日時：平成16年5月29日（土）13：00～17：00
大阪市立大学文化交流センター
石田佐恵子（大阪市立大学助教授・COE
事業推進担当者）
「ジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェ
クト上映会」
ゲスト・トーク 富岡三智（アジア都市
文化学専攻）
「ジャワでの舞踏公演」

第27回研究会

日時：平成16年6月16日（水）10：30～16：20
田中記念館第2会議室
「都市における学校改革とカリキュラ
ム開発」
第1部（司会：添田晴雄（大阪市立大学））
木原俊行（大阪市立大学）
「「総合的な学習の時間」の現状分析—
—都市の学校での可能性と課題——」
馬和民（華東師範大学教育科学学院）
「上海市における「研究的な学習」の
実践及び理論探索——中学校段階にお

ける現状、特徴及び経験」——

第1部討論（コメント：堀田龍也（静岡大学情
報学部））

第2部（司会：添田晴雄）

黄向陽（華東師範大学教育科学学院）
「プロジェクト学習の組織化・指導に
おける教師の力量とその形成」
佐藤真（兵庫教育大学学校教育学部）
「我が国における総合学習の系譜と
「総合的な学習」の位置」

第2部討論（コメント：堀田龍也（静岡大学情
報学部））

総合討論

(3) 海外での活動

平成16年度にBチームは基本的に前年度の計
画を踏襲しながら下記の4つの研究調査プロジ
ェクト（カッコ内は事業に携わる教員）を実施
する。

- 1) 上海市における都市化の歴史的系譜の解明
と都市経済・社会・建造環境の現状と課題（水
内俊雄，中生勝美）
- 2) 都市における学校改革とカリキュラム開発
（水内俊雄，添田晴雄，木原俊行）
- 3) 多文化共生に関する都市実態調査（国際比
較）（谷富夫）
- 4) 都市環境モノグラフ——ソフトシティの基
盤的研究のための実態調査（山野正彦，中川
眞，石田佐恵子，橋爪紳也）
これらの研究は海外でのフィールドワークと
資料収集を中心とするものである。平成16年2
月以降の海外での研究調査，サブセンターを拠
点とした研究交流計画のための出張は下記のと
おりである。

中川眞

平成16年2月28日～3月3日

タイ

タイ・インドネシア・日本研究交流打ち合わ
せ

水内俊雄

平成16年3月9日～14日

西部均（COE研究員）

同3月9日～13日

神田孝治（COE研究員）

同3月9日～15日

垣田祐介（COE研究員）

同3月10日～14日

中国

華東師範大学との研究打ち合わせ及び都市共
同調査

谷富夫・二階堂裕子(COE研究員)・高畑幸(COE研究員)

平成16年3月13日～15日

台湾

多文化共生に関する都市実態調査打ち合わせ及び外国人労働者居住地区の現地調査

添田晴雄・木原俊行

平成16年3月24日～26日

中国

華東師範大学教育科学学院との研究打ち合わせ

山野正彦

平成16年3月25日～30日

タイ

バンコクサブセンター運営管理及びバンコクとその周辺における仏教寺院調査

水内俊雄

平成16年5月14日～18日

中生勝美

同5月14日～20日

中国

華東師範大学との研究打ち合わせ及び都市共同調査

山口智(COE研究員)

平成16年6月3日～9日

タイ

タイの音楽文化研究調査

山野正彦

平成16年6月6日～14日

タイ

バンコクサブセンター運営管理及びバンコクとその周辺における仏教寺院調査

中川眞

平成16年6月20日～26日

インドネシア

ジョクジャカルタサブセンター管理及びタイ・インドネシア・日本研究交流打ち合わせ

水内俊雄

平成16年6月29日～7月2日

中国

華東師範大学との研究打ち合わせ及び都市共同調査

(4) 海外からの招聘研究者と学術拠点交流

- 平成16年3月6日～20日にチュラロンコン大学都市設計教育センター所長バナソピット・メクヴィチャイ氏が招聘研究者として来学された(受入教員は橋爪紳也助教授)。同氏は上記の研究会での発表のほか、水内教授らとともに大阪城公園やあいりん地区など大阪市内を見学し、都市住宅問題などについての意見

交換を行った。

- 平成16年3月23日、チュラロンコン大学チャナロン・ポルンルングロイ芸術学部長が来学され、金児副学長を表敬訪問し、研究交流計画の推進について意見交換した。またチャナロン学部長は同日大阪市立大学医学部付属病院を訪問し、小児科学関係教員及び文学研究科COEバンコク関係の教員との懇談会を行った。この会合には平成16年1月バンコクで開催されたCOE国際フォーラムに参加した山口悦子氏のほか、大阪市立大学大学院医学研究科の山野恒一教授(発達小児医学)その他が出席し、障害者の社会参加の問題を中心に意見交換を行った。
- 平成16年6月15日、馬和中華東師範大学教育科学学院教授、黄向陽同助教授、黄忠敬同講師、王建軍同助教授の4名が招聘研究者として来日し(受入教員は添田晴雄助教授)、6月18日までの期間、上記研究会の開催をはじめ、6月15日に大阪教育大学附属平野小学校視察、17日に大阪市立南中学校視察を行った。また同日には共同研究の出版計画及び10月開催予定の上海シンポジウムについて関係教員と打ち合わせ会をもった。

Cチーム「都市の人間研究」の活動

高梨 友宏

平成16年2月から7月までのCチームの活動について、以下に報告する。

1 構成員

本誌前号所記以降、人事異動、年度変更に伴うメンバー入れ替え、COE特別研究員の新規採用のため、Cチームの構成に様々な変更が生じた。そこで、はじめに平成16年7月現在の構成員を紹介しておこう(リーダーを除き、所属ないし出身専修順)。

COE事業推進担当者: 阪口弘之(Cチームリーダー、拠点リーダー、国語国文学)、中才敏郎(哲学・新規)、金児曉嗣(大阪市立大学学長)、山口久和(中国語中国文学)、松村國隆(ドイツ語ドイツ文学・新規)、芝原宏治(言語情報学)

COE事業推進協力者: 藪木榮夫(哲学・新規)、高梨友宏(同)、伊藤正人(心理学)、大場茂明(地理学)、金光桂子(国語国文学)、松浦恆雄(中国語中国文学・新規)、岩本真理(同・新規)、張新民(同)、山崎弘行(英語英米文学)、杉井

正史(同)、田中孝信(同)、イアン・リチャーズ(同・新規)、田畑雅英(ドイツ語ドイツ文学)、小西嘉幸(フランス語フランス文学)、中島廣子(同)、津川廣行(同)、福島祥行(同)、井狩幸男(言語情報学)、荒木映子(表現文化学)、三上雅子(同)、野崎充彦(アジア都市文化学)

COE特別研究員:鈴木博子(国語国文学専修・新規)、劉慶(同・新規)、竹下幸男(英語英米文学専修・新規)、北原博(ドイツ語ドイツ文学専修・新規)、王標(中国語中国文学専修・新規)

COE研究員:北條慈応(哲学専修・新規)、渡部美穂子(心理学専修)、向井有里子(同)、佐伯大輔(同)、内藤由佳子(教育学専修)、森久佳(同・新規)、名和久仁子(国語国文学専修)、足立匡敏(同)、鈴木康予(中国語中国文学専修)、出口菜摘(英語英米文学専修)、薦田嘉人(同・新規)、坂井隆(同・新規)、筒井香代子(同・新規)、北原寛子(ドイツ語ドイツ文学専修・新規)、田島昭洋(同・新規)

以上、総勢47名である。

2 サブセンターへの派遣事業

平成16年1月以降のCチームにかかわるサブセンターへの派遣事業について、以下の3点に亘って報告する。

1) ロンドン・サブセンターの移転と活用

平成15年2月22日に開設された旧ロンドン・サブセンターは、効率性の問題から、平成16年2月20日をもって賃貸契約が解消された。その後、ロンドン大学SOAS(東洋アフリカ学院)内の一室を、東京外国語大学COEとの間で賃貸料を折半し共同使用する形で再設継続することが決定され、平成16年4月1日以降、SOAS内349号室が新ロンドン・サブセンターとして使用可能となった。

この間、旧サブセンターの賃貸契約解消、ロンドン大学SOASにおけるスペース確保の交渉のために、平成16年2月16~20日に榮原教授(COE本部)、田中一彦助教授(同)および芝原教授がロンドンに出張した。詳細については榮原教授の報告「ロンドン・サブセンターについて」(1)を参照されたい。

さらに平成16年3月4~9日には、阪口教授、山崎弘行教授、杉井助教授がロンドンに出張、SOAS内349号室の共同利用に関する東京外国語大学COE関係者との事前調整、およびSOASとの合意文書締結を行った。詳細については杉井助教授の報告「ロンドン・サブセンターについて」(2)を参照されたい。

その後、平成16年4月29日~5月5日まで、

新ロンドン・サブセンターへの最初の派遣者として筒井香代子氏が出張(但しサブセンター利用は4月30日から)、サブセンターの整備および同年9月に本学で開催予定のCチーム主催国際シンポジウム「都市のフィクションと現実」のための打ち合わせに従事した。詳細については筒井香代子氏の報告「ロンドン・サブセンターについて」(3)を参照されたい。

加えて、6月22日~7月20日には、本学文学研究科の市川美香子教授が利用した。市川教授による報告は次号掲載の予定である。

2) ハンブルク・サブセンターの利用

平成16年2月以降、ハンブルク・サブセンターには、内藤由佳子氏がCOEにかかわる個人研究の推進のために3月9~28日まで、また、高梨が上記シンポジウム「都市のフィクションと現実」のハンブルク大学関係スタッフへの趣旨説明と協力依頼のために3月17~27日まで出張した。これらの詳細に関しては「ハンブルク・サブセンターについて」のそれぞれの執筆箇所を参照されたい。

3) 上海・サブセンターの利用

Cチーム研究員の鈴木康予氏が平成16年3月12~22日までCOEにかかわる個人研究の推進のために上海・サブセンターに派遣された。詳細については「上海・サブセンターについて」の同氏執筆箇所を参照されたい。

なお、本稿執筆の時点では、今後の派遣計画として確定しているものはない。

3 研究例会活動

Cチームの研究例会は原則通り、平均してほぼ月1回のペースで行われている。

ところで、最初に記したように、現在Cチームは40名を超える大所帯となっている。しかし、メンバーの増大が研究例会活動を活況に導いているとは必ずしも言いがたい点は問題である。それには、各メンバーの関心を統一的な方向へと収斂させることが難しいこと、多くのメンバーの都合が一致する研究会日時を設定することが難しいこと、等の理由が考えられよう。しかし、チームとしての統一的な研究方向を打ち出し、研究例会活動をより活発なものとするためには、やはり、メンバー各自の研究協力への意思を覚醒させつつ、有効な策を講じることが緊要である。

以下、本誌第3号所記以降の研究例会活動を記す。

第17回研究会

3月9日(火) 16:00～

法学部棟11階 711C

研究報告

1. 大場茂明 (COE事業推進協力者・地理学)
「ドイツにおける都市再生戦略の可能性」
(スライド使用)
2. 津川廣行 (COE事業推進協力者・フランス語・フランス文学)
「アンドレ・ジイドの作品にみる都市パリー—『パリュード』から『贖金つかい』へ—」

COE連携シンポジウム

大阪市立大学フランス文学会・21世紀COEプログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」連携シンポジウム「フランス都市文化に見るポストコロニアリズムと多文化主義の諸相」

3月28日(日) 14:00～17:00

法学部棟11階 711C

内容：フランスのサブカルチャー面を中心に、postcolonialism と multiculturalism の諸相に関し、両者が先鋭的な問題として立ち現れる場である「都市」との関連において、多面的に論じる。

コーディネータ：

鈴木田研二 (大阪市立大学非常勤講師)

パネリストおよび報告タイトル

粕谷祐己 (金沢大学)

「アラブ系移民二世の音楽とアイデンティティ探索」

釣馨 (神戸大学非常勤講師)

「共振する日仏のヴァーチャル世代」

酒井麻実 (甲南女子大学・パリ第7大学後期博士課程)

「都市におけるラップの機能」

福島祥行 (大阪市立大学・COE事業推進協力者)

「都市の境界性と遊行性」

第18回研究会

4月14日(水) 16:30～

文学部棟1階

比較言語文化情報処理実験室 (128号室)

サブセンター派遣報告：

鈴木康予 (COE研究員)、内藤由佳子 (同)、杉井正史 (COE事業推進協力者)、高梨友宏 (同)

研究報告

1. 金光桂子 (COE事業推進協力者・国語国文学)
「『花鳥風月』から『衣更着物語』へ」
2. 張新民 (COE事業推進協力者・中国語中国

文学)

「劉呐鷗が描写した上海」

第19回研究会

5月13日(木) 18:00～

1号館3階 特別会議室

研究報告

1. 北條慈応 (COE研究員・哲学)
「ケーニヒスベルクにおけるカントの眼差し」
2. 北原寛子 (COE研究員・ドイツ語ドイツ文学)
「ヴェスターマン月報 (1906) における教養小説観」

サブセンター派遣報告：

筒井香代子 (COE研究員・英語英米文学)

第20回研究会

5月31日(月) 16:00～

経済学部棟2階 第4会議室

研究報告

1. 坂井隆 (COE研究員・英語英米文学)
「Tennessee Williams と New Orleans—転覆させる「ブラックネス」と「クイアネス」」
2. 野崎充彦 (COE事業推進協力者・アジア都市文化学)
「清溪川の位相—ソウル人工河川の歴史と文化」

第21回研究会

6月16日(水) 16:30～

文学部棟1階 128室 (比較言語文化情報処理実験室)

研究報告

1. 薦田嘉人 (COE研究員・英語英米文学)
「都市を巡る顕現 (エピファニー) の問題—W.B. イェイツの「動揺」“Vacillation” (1932)を中心に—」
2. 田島昭洋 (COE研究員・ドイツ語ドイツ文学)
「18世紀後半～19世紀前半におけるウィーンの社会と楽都の形成—「ウィーン古典派」とシューベルトの時代—」

講演会

7月8日(木) 16:30～

全学共通教育棟4階 外国語特別演習室5

講師：湯浅雅子 (リーズ大学英文学部ワークショップ・シアター客員演出家、大阪教育大学非常勤講師)

題目：

1. 近松プロジェクトの概要と主旨
2. 第1回作品 Woman-Killer in Oil Hell 「女殺油地獄」のリーズ大英文学部ワークショップ・シアターでの公演について

4 今後の活動計画

最後に、近い将来に実現される見通しの2つの活動について、簡単に触れておきたい。

- 1) 国際シンポジウム「都市のフィクションと現実」(平成16年9月13～14日)

平成15年9月30日、10月1日の2日間に亘って開催されたCチーム主催国際シンポジウム「都市とフィクション」(企画・推進:芝原教授および田畑助教授)の成果を継続・発展させるべく、平成16年9月13日、14日の2日間に標記のシンポジウムが開催される予定である。今回の企画・推進は前回担当した芝原教授と田畑助教授に、山崎弘行教授及び高梨が加わり、計4名で担当する。全体は、1「都市の色彩と音楽」、2「都市と映画・演劇」、3「都市と夢・幻想」、4「都市のフィクションと現実」の4つのパネルから構成され、パネリストは総勢21～22名(内訳は、国内外からの招聘者6～7名、本学教員8名、本学院生7名)の予定である。なお、招聘者のうち、ハンプルク大学からミリアム・ローデ助教授、ロンドン大学SOAS(東洋アフリカ学院)からアラン・ガードナー・カミングズ講師の招聘が確定している(いずれもCOE経費による。それぞれの招聘期間は、ローデ助教授が平成16年9月11～17日、カミングズ講師は9月11～15日)。また昨年のシンポジウムでもパネリストなどをおつとめいただいたロンドン大学SOASのステューヴン・ドッド助教授には、シンポジウム開催時には幸い東京に在留しておられるため、国内招聘の形でお招きして、再度パネリストをおつとめいただく段取りとなっている。その他、情報映画評論家の都築政昭氏、リーズ大学他非常勤講師で演出家の湯浅雅子氏、本学名誉教授の丹下和彦氏もお招きする。またパネリストをつとめる本学教員・院生計15名のうち、4名が外国人である。以上のように、本企画はアカデミズムの枠にとらわれることなく、国内外の多彩な顔ぶれによって遂行されるシンポジウムであり、チームの内外から大きな期待が寄せられている。

- 2) 近松プロジェクト

英国リーズ大学や大阪教育大学で非常勤講師を勤めるなか、自ら近松作品を英訳して、

英国学生に上演を指導するなどユニークな活動を展開しておられる湯浅雅子氏から、近松作品など近世文学や浄瑠璃・歌舞伎の研究者として著名な阪口弘之教授に対して、来日公演の可能性と日本側の協力体制についての打診があった。これを機に、CチームはCOE事業の枠内で杉井助教授を窓口として湯浅氏(リーズ大学)との連携を図り、翻訳やワークショップの実現を目指した研究協力体制を確立することを決定、この計画を具体化させつつある。すなわち、上述のとおり、湯浅氏には7月8日にすでに講演会でその興味深い活動の一端をご披露いただいたが、さらに9月の国際シンポジウム「都市のフィクションと現実」でも、パネリストの一人をおつとめいただく運びとなっている。氏との間に築かれる研究協力体制から、創造的な活動が生み出され、研究上の豊かな実りが収穫されることを祈念したい。

(なお、研究例会毎に事業推進担当者および同協力者によるチーム運営委員会が毎回開かれたが、上記シンポジウムの準備進行状況の報告と近松プロジェクトに関する検討がなされた以外は、実務レベルの連絡に終始したため、今回も、運営委員会の内容については立ち入った報告を控えさせていただいた。)

以上をもってCチームの活動報告とする。

上海・サブセンターについて

- (1) 栄原 永遠男

全体

平成16年1月22日から6月25日までの状況を報告する。

まず、華東師範大学から3月下旬に平成15年度の会計報告を受け、点検の上了承した。経費の使用について意見交換し、今年度からは2期にわけて会計報告を受けることとした。

前号に記した華東師範大学との交渉の結果、人文ルート、教育ルート、法政ルートの3ルートとも、順調に意見交換および共同研究が進みはじめた。

以下、各ルートの責任者から提出していただいた報告を、栄原の責任で加筆・整理した。

人文ルート

〔出版にいたる経過〕

人文ルートでは、昨年12月に華東師範大学で開催したシンポジウムの内容を学術書として出版することを実現することを目標とした。

12月下旬には華東師範大学側の原稿も出そろったので、日中の論文8編を双方で独自に査読しあった。査読のポイントは、論文内容の学術的水準、シンポジウムのテーマとの適合性といった根本的問題点から、学術用語の適否、表記の統一に至る技術的問題点を忌憚なく指摘して相手側に伝えた（華東側からも伝えられた）。この査読意見に基づいて、さらに論文を加筆修正し、再度、日中双方で最終的なチェックを行った。

論文の最終稿ができあがったのは本年1月下旬であった。最終原稿は高瑞泉人文学院院长の手によって上海古籍出版社に届けられた。初校のゲラ刷りが届けられたのは2月10日、ただちに著者校正を加えてゲラ原稿を上海に返送。二校以後は高瑞泉教授に一任したが、校正上の必要なやりとりはメールで行うとともに、上海サブセンターに派遣されていたCOE研究員の山崎覚士氏にも対応してもらった。

研究発表、論文提出、査読、校正とまことに慌ただしいスケジュールであったが、当初の予定通り、3月25日につぎのような内容で無事刊行することができた。

〔刊行物の内容〕

高瑞泉・山口久和主編『中国的現代性と都市知識分子 China's Modernity and Urban Intellectuals』（大阪市立大学文学研究科都市文化研究中心・華東師範大学人文学院・華東師範大学現代都市社会研究中心発行）（2004年3月、上海古籍出版社、ISBN 7-5325-3664-5）

序 高瑞泉（華東師範大学人文学院教授）
中国近世末期都市知識分子的変貌——探求中国近代学術知識的萌芽——

山口久和（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

近代価値観変革と晩清知識分子

高瑞泉（華東師範学院人文学院院长）

近代中国都市的公共領域——以上海為例——

許紀霖（華東師範大学人文学院教授）

商業化、城市化、儒教化的潮流和家的上昇——以南海県深村堡の霍氏為例——

井上徹（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

“被压迫者”的知識如何可能？——“真的知識階級”与“底層”民衆——

羅崗（華東師範大学人文学院助教授）

“輕性知識分子”与中国現代的表意实践——以張愛玲為中心的討論——

倪文尖（華東師範大学人文学院助教授）

横光利一《上海》中的空間表現

広重友子（COE共同研究員）

《毎日電影》与姚蘇鳳

張新民（大阪市立大学大学院文学研究科助教授）

Summary

后記 山口久和

〔今後の予定〕

現在、今年度秋に本学で開催を予定しているシンポジウムのテーマとサブテーマ、参加者の人選、シンポの運営方法、研究成果の出版方法、等について高瑞泉人文学院院长と鋭意検討中である。

教育ルート

教育ルートは、平成15年12月の合意に基づき、平成16年6月に大阪市立大学で共同研究会を開催することをめざして準備を進めてきた。

〔上海における意見交換〕

①添田晴雄（大阪市立大学大学院文学研究科助教授、平成16年3月24日～26日）、木原俊行（同、3月24日～25日）の2人が上海に出張し、平成16年度の研究計画等の打ち合わせを行った。その経過は、以下の通りである。

②3月24日（火）

- a. サブセンターの陳暎芳氏とプロジェクトの運営について情報交換
- b. 上海市教育委員会の張進氏、安玉海氏と情報交換

③3月25日（水）午前中

- a. 馬和民（華東師範大学教育科学学院教授）、黄向陽（同助教授）、王健軍（同助教授）、黄忠敬（同講師）と会議

上海側新メンバーの紹介

王健軍助教授（教育学系、基礎教育改革と発展研究所所属）、専門は教育課程論、教師教育論（研修論）

日本側新メンバーの紹介

佐藤真（兵庫教育大学大学院学校教育研究科助教授）

堀田龍也（静岡大学情報学部助教授）

平成16年度の共同研究の柱の確認

・ISBN著書（中国語）、冊子体報告書（日本語）の刊行。

・6月（大阪）と10月（上海）にシンポジウムを開催する。

・年間スケジュールを、ISBN著書刊行を中

心に計画。出版社との交渉は上海側に依頼。
6月招聘の打ち合わせ

来日メンバー、訪問予定校などにつき意見交換。総合学習関連研究マトリクスを用いて問題意識の共有化をはかった。

④3月24日（水）午後

a. 上海市静安区第一中心小学訪問

陳小文副校長が同校の取り組みを説明、その後施設見学。

探究型課程、問題解決学習について、同校の考え方と実践例の紹介を受けた。

『走向現代学校教育実践研究——展示活動匯報資料』（2003年12月）を入手。

b. 黄向陽助教授、黄忠敬講師と研究テーマについて意見交換

午前中の研究マトリクスについて、具体的な事例をもとに討議、日本、中国の教育改革の動向について意見交換。

⑤帰国後、E-mailを通じて、6月のシンポジウムに向けて準備を進めた。

〔合同研究会〕

①平成16年6月15日（火）に、以下の4名が、ビザの関係で予定より半日遅れて来日した。

馬和民 黄向陽 王建軍 黄忠敬

以下のような日程と内容で研究交流が行われた。

②6月15日（火）10時30分～18時30分

大阪教育大学附属平野小学校視察

(1)生活科及び総合的な学習の授業見学

(2)研究担当者等への聞き取り

(3)研究集会への参加

(4)その他 参加者約40名

③6月16日（水）10時30分～16時20分

田中記念館第2会議室

共同研究会「都市における学校改革とカリキュラム開発」

10時30分 開会の辞 榮原永遠男（上海・サブセンター所長）

10時45分 第1部 司会：添田晴雄

(1) 木原俊行「総合的な学習の時間」の現状分析——都市の学校での可能性と課題——」

(2) 馬和民「上海市における「研究的な学習」の実践及び理論探索——中学校段階における現状特徴、及び経験——」

(3) 第1部討論

コメント：堀田龍也

14時 第2部（司会：添田晴雄）

(1) 黄向陽「プロジェクト学習の組織化・指導における教師の力量とその形成」

(2) 佐藤真「我が国における総合学習の系譜と「総合的な学習」の位置」

(3) 第2部討論

コメント：堀田龍也

16時 総合討論

16時30分 閉会の辞 参加者約30名

以上の合同研究会の運営には、教育学教室あがてのバックアップがあり、また教育学専攻の大学院学生の手伝いで、成功を収めた。

④6月17日（木）10時50分～16時

大阪市立南中学校視察

(1) 総合的な学習の授業見学

(2) 校長及び授業担当者への聞き取り

(3) その他 参加者約20名

16時～18時

出版計画（シラバス、担当者、原稿締切、翻訳、編者、予算等）及び10月の上海シンポジウムについて意見交換した。

⑤6月18日（金）

9時30分～10時 文学研究科長会見

午後、関西国際空港より帰国

法政ルート

〔共同研究の経過〕

以下のように上海市内住環境調査を実施した。

①平成16年3月9日～15日には、水内俊雄（大阪市立大学大学院文学研究科教授）ほか、COE研究員の神田孝治、西部均、垣田祐介の3氏が参加した。日中、連日6～7時間ほど徒歩によって静安区の調査を行った。あわせて都市地図も購入した。

3月10日には、サブセンターにて、陳映芳（華東師範大学法政学院教授、現代城市社会研究中心所長）、林拓（資源与環境学院副教授）、水内、法政学院の社会学専攻大学院生の江軍・王建軍・黄勇の3名、上記COE研究員3名の合計9名で研究会を開催した。

3月11日には、陳、林、文軍（法政学院副教授）、羅崗（資源与環境学院教授）、達良俊（同副教授）、華東師範大学の院生（地理学と社会学の院生、学部生も出席）のなど合計23名で研究会を行なった。林氏の指導の院生孟眉軍が華東師範大学の地理班の研究進展状況を、水内が大阪市立大学側の進展状況を紹介した。

内容は、都市文化研究センターのホームページに挙げているものを中心におこなった。華東の地理班の上海の行政区画の変遷についてはさておき、大阪側は、Exploring Shanghai before 1949, and its Heritage in

the Contemporary Urbanization」といったテーマをメインに、当面、特に住環境の上海固有の集合住宅である里弄住宅について、その物理的特徴や建設年代、コミュニティのあり方を、将来の聞き取りも含めて、建築学的、経済社会的な背景を重んじつつ、悉皆調査と、重点サンプル調査を行なう方向で進めてゆくことにした。

しかし、つっこんだ聞き取りをする段階に達していないことと、統計資料へのアクセスがまだ確保されていないこと、関連資料の収集が緒についたばかりであるので、COE研究員も含め、5月までにある程度の上海集合住宅史の背景となるような情報や研究の摂取につとめることになった。

- ② 5月14日～18日まで、水内、中生勝美（大阪市立大学大学院文学研究科助教授）、西部（COE特別研究員）、大倉祐二（COE研究員）、四井恵介（COE研究協力者）で、平成16年度最初の調査を行った。

上海の都市住宅構造の解明という観点から続けている市内実地調査は、今回は重点的に静安区で、詳細地図を持参しつつ、特に集合住宅の変遷に着目して、調査を行った。特に里弄住宅の現状と残存状況をみたが、1946年を100とすれば40%くらいの残存状況であった。1里弄が2000人くらいの居住人口で、1街区に7里弄ほどあったとある現地では（こうした街区が今再開発で全面撤去があちこちで進んでいる）、2街区まとめて再開発されており、1.5万人の人口が2、3ヶ月で一挙に消えるという、これが上海の社会・政治問題化している原因となっていることを実感する。写真がまさにそのことを物語っている。



ただこのテーマは、国際共同合作にするには、時期尚早とサブセンターでは判断している。ちなみに人口33万人の静安区はこの1年に1万人人口が減っているが、こうした撤去型の再開発

のほうが、跡地での高層高級マンションの建つ再開発より、人口包容力が大きかったと思われる。ちなみに里弄では15平米に1家族という超過密であるが、このへんでも高層マンションはミドルクラスしか手の届かない額として、再開発による作られた格差が空間的にも露骨に見える状況にあるといえる。

上海図書館でも、里弄や都市計画関係の資料の収集を精力的に行い、少なくとも分布や、時期的変化が押さえられるような戦前の資料が、地図とともに存在することがわかり、できるかぎりコピー、あるいは書店での購入を図った。図書館での集中的な資料収集は、COE特別研究員西部を中心に、7月に行うことにしている。

〔ニューズレター等〕

ニューズレターは、つぎのように発行された。

第9号：平成16年（2004）1月15日発行

第10号：平成16年（2004）3月1日発行

第11号：平成16年（2004）5月20日発行

第12号：平成16年（2004）5月25日発行

これらは、HPにもPDF化してあげており、読むことができる。中国語であるが、中国国内の多くの研究室、教室、関係機関に送られ、その内容の濃さや、アットゥデイトな話題に、注目されるニューズレターになっている。

また昨年度の調査の成果が、これも中国語であるが刊行されている。陳映芳等著『征地与郊区農村的城市化——上海市の調査（土地収容と郊外農村の都市化——上海市の調査）』（文匯出版社、2003年12月、ISBN 7-80676-522-0、265ページ）。なお、この著書に対する書評を、参考に掲載しておく。

都市化における土地収容と建物撤去の問題

上海理工大学管理学院公共事業管理研究所

羅 国 芬

郊外の農村における土地収容と建物撤去の問題は、現在メディア、民衆、政府いずれも比較的关注を寄せるホットなテーマである。その中で顕在化した主要な問題には次のものがある。

取り壊し強行。立ち退き対象者に対する乱暴な扱い。「危険建築物改造」、「旧市街改造」を口実に商業開発を行っている実態。建設計画は首尾一貫したものではなく、住民が戻って来られない事態を引き起こしている。その補償は不合理なもので、政策は連携の取れたものではない。そのため立ち退き対象者に損失を与え、極端なケースは立ち退き対象者の中で立ち退きによって貧困となり、生存の基盤を失うという重大な事態を作り出している。

これらの問題が引き起こした多くの紛争や悪質な事件は、さらに社会の多方面から関心を集めている。

強力な都市化がもたらした社会の不均衡と構造変化に直面して、いかなる凡庸な答えもおそらく不十分であり、とりとめがないものだろう。したがって、単なる烏合の衆的な道徳的義憤や常識的思考を捨て去ること、そして現在、中国で起きている都市化における土地収容と建物撤去の問題に対して実証的な調査と学問的な分析を行うことが不可欠となっていると思われる。

華東師範大学社会学部主任、陳映芳教授が主宰する研究の成果、『土地収容と郊外農村の都市化——上海市の調査』が今年出版されたが、この方面に有意義な試みがされている。

本書の前書きで、陳映芳教授は、郊外の農村における土地収容と建物撤去に関する一連の社会学の問題に対して、深く掘り下げた分析を行っている。総括すれば、論旨は以下の二点にまとめることができる。

まず、都市化の背景により土地収容と建物撤去の問題を扱っている。陳教授は、今日の都市化が、マクロ的には疑いもなく発展目標とする現象および思想、理論の重要な源流の一つである発展主義から分析し、全面的な「都市化」概念が少なくとも以下の内容を含んでいなければならないと指摘している。：人口、生態的側面（人口集中、空間的凝集、土地利用の機能分化など）、社会構造の側面（専門分化の発達、地縁・血縁関係の希薄化、団体参加の多様化など）、生活構造の側面（生活を構成する諸要素および相互関係の変化、都市型的生活意識、生活様式、生活目標および手段等の形成と拡散）、社会意識の側面（都市型気質の形成）。

次に、社会構造から人々の意識まで各レベルから、土地収容と建物撤去のプロセスにおける各方面の動き、特に土地収容と建物撤去のプロセスにおける農民の動きに着目している。郊外の農村における土地収容と建物撤去のプロセスで、農民の職業が非農業化し郊外の生態が変化した以外に、ライフスタイルまで変化が及んでいる。郊外のコミュニティにおける雑居化の傾向、家庭形態の変化、隣人関係の希薄化・伝統的共同体の解体等の社会構造の変化、郊外住民の生活意識、権利意識、及び社会的性格などの側面の変化、などに触れている。

このように複雑で深刻な大きな変化は、土地収容と建物撤去にともない同時に発生するものである。しかしかつてはメディア、政府、そして学術界までもこの問題に関心を払ってこなかった。したがって陳映芳教授の本書での記述

は、実質的には社会学からの研究角度であるが、土地収容の過程における各方面の関係者、とりわけ農民の思想と行為に対して、考える枠組みを提起しているのである。

新鮮な理論の他に、実証調査研究も本書の大きな特徴である。課題の職責を引き受けて報告書を作成し、資料を深く分析して原稿を完成させるまでに、2年近くかかり、そのうちフィールドワークに何ヶ月も費やしている。

ここで特に、一つ指摘しておかなければならない点がある。本書の研究班の土地収容と郊外の都市化問題に対する研究は、「都市化」に与えられた正当性を出発点として、この動きに対する必要性の類を評価したものではない。社会的事実を確認することから当面のこの都市化を考察したものなのである。

さらにこうも言えるだろう。本書の注目すべき点は、郊外の農村における土地収容・都市化の問題に対する意識と実証研究の方法であって、「箇条書きにした陳情書」式の対策を建議したものではないことである。（『社会観察』2004年6月号、上海社会科学院）（中生勝美〔大阪市立大学大学院文学研究科助教授〕訳）

(2)

鈴木 康予

はじめに

報告者は平成16年3月12日から3月22日までの10日間、COE研究員として上海サブセンターに派遣していただいた。3月12日から16日、20日から22日は上海で、3月17日から19日は北京にて資料調査などを行った。

今回の滞在の目的は主に2点。まず1点は、博士論文執筆の準備として、これまでの調査の遺漏を補うこと、および張天翼の手稿を多少なりとも閲覧すること、もう1点は、作家張天翼（1906-1985）の娘さんである張章さんにインタビューすることであった。

以下では、報告者自身の研究活動、またサブセンターをめぐる状況について報告する。

研究活動について

まず滞在目的の1点目について。報告者のCOE研究員としての研究テーマは「1940年代上海・武漢・長沙にみえる戦時下文学の一側面——張天翼におけるパロディと児童文学——」である。

報告者は、これまで上海を中心に資料収集を行ってきたが、地方で出版された新聞雑誌等の文献資料については確認できていないものもあった。また1949年すなわち中華人民共和国建国以

降の児童文学に関する資料についても不十分であった。

今回、上海図書館（上海）、北京大学図書館・中国国家図書館（北京）を訪れ、未確認であった雑誌文献の一部、建国後の児童文学に関する資料、そして数多く出版された作品集の初版本から各種修訂本を収集することができた。また中国現代文学館（北京）に所蔵されている張天翼の手稿についても、わずかながら閲覧することができた。

中国現代文学館での手稿閲覧については、かなり厳しい制限が加えられた。閲覧可能なのは1日に5件のみ、しかも「文学館側が許可したもの」という条件付きで、コピー、写真撮影などは一切禁止されていた。ひたすらメモをとるしかない。

張天翼は、他の作家たち同様、文化大革命で批判され、その後脳血栓で半身不随になっている。そのためか文学館側も過敏気味で、政治性が強いと思われるもの、特に文革中、過去の国民党との繋がりを指摘され、自己批判のために書かされたと思われる文章、日記や身辺雑記などの閲覧は許可されなかった。

ただ、上述のような不自由な状況であったとはいえ、1950年代に書かれた未完の脚本「華威先生在今天」（建国前の代表作「華威先生」の続編）、「小貢」（1953年に北京新華印刷工場でドイツ製のソーターを改良し、作業効率を飛躍的に押し上げた貢才元という青年労働者の功績を称揚する物語）という小説の断片や、「小貢」執筆のために集めたと思われる貢才元を扱った雑誌記事の切り抜き、長編小説創作のためのメモ（原稿用紙の4分の1ほどの大きさの紙1枚に1人ずつ、登場する人物の名前、性別、年齢、職業、家族構成、性格などが書き込まれたもの）などを目にすることができた。

建国前の張天翼は、左翼文壇の新旗手として活躍し、諷刺性の強い小説を多く著した。しかし建国後に発表した作品は、新時代を賛美するような童話、児童文学および評論に限定されているため、従来、建国前と建国後の張天翼の創作態度に断絶を見る向きが多かった。しかし実際には、張天翼は建国後にも小説を、それも新時代の労働者を賛美するような小説を書こうとしていたにもかかわらず、結局その作品は未完のまま残されていたことがわかった。

これらのことを考え合わせると、建国前・建国後をつなぎ、張天翼の創作活動をトータルに理解しようとする場合、また張天翼にとって童話という表現方法の持つ意味を考察する場合、これらの手稿の存在は決して軽視できないものだと思う。今回は是非、時間的余裕をもって更に多く

の手稿を閲覧したいところである。

次に滞在目的の2点目について。3月17日、中国作家協会（北京・美術館街）の1室で張章さんにインタビューを行った。張章さんは1954年に張天翼・沈承寛夫妻の娘さんとして誕生され、物心つくころには、文化大革命の影響で父親と離ればなれの生活を送られていたそうである。そこで、自ずから話題は文化大革命中、またその後の張天翼の様子などが中心となった。

文革で張天翼が批判されたため、娘への影響を考え、沈承寛さんが下した離婚という決断（文革終了後、張章さんの希望により再婚）、一瞬にして友人が敵にかわってしまう不穏な空気のなかで、張天翼が受けていた心理的圧迫はどのようなものだったのかなどについて語っていただいた。

張天翼については故居も残っておらず、彼に関する資料はすべて中国現代文学館に寄贈され、手元には何も残っていないとのことだったが、写真でしか見たことのない張天翼とよく似た面差しの女性と相見え、生前の彼の様子やその作品についてざっくばらんに語り合えたのは、報告者にとって大変貴重な体験だった。現在彼女は中国作家協会・塗光群氏の紹介で雑誌編集に携わっておられるとのことだった。また張天翼が特に親しくしていた姉・張稼梅のお子さん方もみな北京在住であるとの消息を得た。

なお、今回の資料調査に関しては、華東師範大学中文系教授・呉俊先生に多大なるご尽力を頂いた。北京大学図書館、中国現代文学館等に提出する紹介状の発行、中国作家協会・塗光群氏、張章さんとの連絡、更に武漢・長沙における各図書館の所蔵状況の問い合わせなど、資料調査全般にわたり便宜を図っていただいた。この場を借りて心より感謝の意を表したい。

また、今回の派遣期間中に収集した資料は、平成16年7月3日、関西大学100周年記念会館にて開催される日本現代中国学会・関西西部会2004年夏期研究集会での報告「張天翼における童話——建国後の創作活動・『宝のひょうたんの秘密』を中心に——」において大いに役立てることができた。

上海・サブセンターについて

上海・サブセンターは、大阪市立大学OCU都市文化研究センターという名称で華東師範大学・田家炳教育書院の4階428・430室におかれている。このセンターの管理は華東師範大学人文学院長・高瑞泉先生、現代都市社会研究センター所長・陳映芳先生をはじめ、陳英芳先生の研究生および学生の方が行っている。

今回報告者が利用したのは428室のみだった

が、430室は非常に立派な会議室であり、研究会の開催などに随時使用しているとのことだった。428室についても、常時研究生もしくは学生が利用しているようである。

報告者は上海での滞在が6日ほどと短期だったため、鍵の管理は研究生の1人にしていただいたが、長期滞在の場合には鍵の管理を任せられ、自由に使用することができるそうである。428室の設備については、デスクトップのパソコンが1台、その他に椅子・机などが揃っており、パソコンの管理も非常によくなされていた。基本的なソフトがインストールされ、日本語でも入力が可能である。インターネット環境も整い、レーザープリンターにも接続されていたため、書籍のオンライン検索が瞬時にでき、プリントアウトも自由だった。ただ書籍については拡充の余地があるように思われた。

おわりに

サブセンター滞在中には、高瑞泉先生をはじめ、陳映芳先生、研究生および学生の方に大変よくしていただいた。特に鍵の管理については何度か報告者の無理をきいていただいた。この場を借りて改めて感謝の意を示したい。

また今回COE研究員として上海サブセンターへ派遣していただいたことで、資料収集のみならず、張章さんにインタビューをするという大変貴重な経験をすることができた。収集した資料、そして今回体験したことをもとに、張天翼自身及びその作品に対し更に深い考察を加え、自分なりの張天翼像を明らかにしていきたい。最後にこのような機会を与えていただいたことに心より感謝の意を表したい。

ジョクジャカルタ・サブセンターについて

中川 眞

平成16年1月29日に「Coexistence in the Multicultural City」というテーマで第2回アカデミック・フォーラムがガジャマダ大学マルチメディア室にて開催され、大阪市立大学側から4名、インドネシア側から4名が発表、またビデオのプレゼンテーションも行われた。参加者は第1回より多く、80名を超えた。大阪市立大学からの出席者は、山野正彦、谷富夫、中川眞、石田佐恵子、多和田裕司、岸政彦の6名であった。同時に、1月28日～2月1日に現代デザイン専門学校において「Imaginary Landscape Yogyakarta」と

いう展覧会が行われ、写真、サウンドスケープ、ビデオの展示によって、COEの成果をジョクジャカルタ市民に広く投げかけ、マスコミの反応も多くあった。

環境モノグラフ研究のひとつである「ジョクジャカルタ・サウンドスケープ調査」班は、1月から毎月中旬の3日間、ジョクジャカルタ市内の9カ所において定点観測を行っている。これは平成16年12月まで続けられる予定である。録音と測定ならびに資料整理などは、インドネシア芸術大学民族音楽学科長のブディ・ラハルジョ氏が中心に行い、サブセンターが保管や整理作業に活用されている。

中川眞が平成16年6月20～25日にサブセンターに滞在し、ガジャマダ大学、インドネシア芸術大学の教員と会合をもって、本年度の活動の調整や確認を行った。この会合では、第3回アカデミック・フォーラムを11月3日にガジャマダ大学にて「Tourism and Education」というテーマで行うこと、その際の発表者はインドネシア側4名、大阪市立大学側3名、タイのチュラロンコン大学から1名の計8名とすることが決まった。また、この時に第2回アカデミック・フォーラムの報告書が配布できるよう、出版の準備を行うこととなった。さらに、研究者交流として、本年度は卓越した教員をガジャマダ大学から、博士課程学生をインドネシア芸術大学から大阪市立大学に派遣することとした。

次に、バンコク・サブセンター事業とも関連することであるが、平成16年2月28日～3月3日にインドネシア芸術大学のヘルミエン・クスマヤティ副学長がバンコク・サブセンターを訪問し、チュラロンコン大学のチャナロン・ポーンルングロイ芸術学部長、ブッサコーン・サムロントン副学部長と会談、今後の2校間の交流に関する意見交換を行った（中川眞も同行）。また、ヘルミエン副学長の滞在中、芸術学部主催の展覧会「Red Hobby」を見学する他、ヘルミエン副学長による「ジャワ舞踊」のワークショップが行われ、多数の学生、教員が出席して好評を博した。

さらに、6月20～23日に、チャナロン・ポーンルングロイ芸術学部長がジョクジャカルタ・サブセンターを訪問し、インドネシア芸術大学のイ・マデ・バンデム学長、イ・ワヤン・ダナ副学長などと会合をもち、教員間の交流、Art for All事業のインドネシアにおける開催などについて具体的な検討が行われた。その結果、7月30日～8月3日にタイで行われるArt for Allをインドネシア芸術大学のジョハン・サリム講師が視察することとなり、バンコク・サブセンターに7月21日～8月6日派遣されることが決まった。早ければ

来年度に Art for All をジョクジャカルタで開催し、その際にはジョクジャカルタ・サブセンターがソフト面や教員派遣などで支援することになる。このような共同的な活動を見越して、近い将来にインドネシア芸術大学とチュラロンコン大学芸術学部の間で学術交流協定を締結するよう準備を行うこととなった。そうなれば、大阪、バンコク、ジョクジャカルタの3つの拠点が面の一部として機能することとなる。

最後にジョクジャカルタ・サブセンターと関連する、日本国内での事業を2つ報告する。平成16年1月末にジョクジャカルタにて開催された展覧会「Imaginary Landscape Yogyakarta」の続編として、4月24日に京都芸術センターにて写真と音響（サウンドスケープ）の展示が、5月29日に大阪市立大学文化交流センターにてビデオの上映と講演が行われた。

ジョクジャカルタ・サブセンターはCOE関連の教員や研究員、また共同研究を行っている地元の研究者が利用しているが、大阪市立大学の前期博士課程の学生が調査に訪れた際（2月23日～4月10日、7月3日～8月26日）にも利用されており、設置している意義は大きい。

バンコク・サブセンターについて

山野 正彦

バンコクサブセンターはチュラロンコン大学文芸学部・芸術学部の入る15階建ての学舎の14階に平成15年2月1日付で開設された。

オフィスは面積約20㎡、冷房完備、学内LAN配線が既設された研究室フロアにあり、快適な研究環境が整えられている。備品として購入されたパーソナルコンピューター一式、ビデオモニター、マルチビデオコーダー、ビデオカメラ、CDコンポなどは、バンコクに駐在する日本側の研究者ならびにタイ側の研究者たちによって有効に活用されている。平成16年3月と6月にサブセンターに出張・滞在した山野正彦はこの設備を利用して、芸術学部のククディエ・カンタマラ助教授とともにバンコクとその周辺における仏教寺院の壁画調査研究を継続している。平成16年6月には山口智COE研究員も音楽文化研究のため滞在した。

現地雇用の事務補助員のSudkanung Ittivechさんは1年の契約期間を終え、平成16年2月末に退職した。平成15年4月開催の第1回国際フォーラムの運営とその英文報告書の出版に尽力した

彼女の活躍に対し謝意を表したい。後任の事務員として16年5月から Narattaporn Modjotさんが週3回勤務している。ボランティア活動の経験を持つ彼女は今日日本語の勉強に余念がない。早速今年1月に開催されたフォーラムの報告書の編集に取り掛かっている。

平成16年度のフォーラムは文化遺産の意義とその観光に果たす役割について考えるために、Cultural Heritage and Tourism（仮称）をテーマに、12月8日の開催をめざして現在準備中である。

前号のこの欄で触れたが、サブセンター維持の経費を節減するために、事務員の勤務時間を減らし、謝金等の支払方法を改善したことにより、前年度の6割程度の予算で運営できる見込みである。

ハンブルク・サブセンターについて

(1) 内藤 由佳子

報告者は、平成16年3月9日から3月28日まで、COE研究員としてハンブルク・サブセンター及び、その周辺都市において資料の収集活動に従事した。今回の派遣の目的は、報告者の研究テーマである「ドイツ新教育運動期における都市型協同体学校に関する研究」をすすめる上で必要な資料を収集することであった。

1 ハンブルク・サブセンターについて

ハンブルク・サブセンター派遣に際して、事前にハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学教室の宮崎講師を通じて、秘書のベーレンス氏にサブセンターの鍵の受け渡しを依頼した。到着の翌朝、ベーレンス氏から鍵を受け取り、すぐにサブセンターを使用することができた。センターの状況は、電子機器、備品、消耗品共に問題なく、円滑に研究調査活動を開始することができた。また、3月18日からサブセンターを利用される高梨助教授への鍵の引継ぎについても、ベーレンス氏に依頼した。

3月は学期休暇中であり、滞在期間中、日本学教室の先生方の多くはご不在であったが、ポール教授、山守講師にお目に掛かる機会を得て、短時間ではあったが滞在目的などをお話させていただいた。

宿泊施設に関して言うと、今回は、短期間の滞在ということもあって、ゲストハウスを予約することはできなかった。しかし、報告者が以前（平

成12年4月～平成14年3月)、ハンブルク大学へ留学していた際の知人の計らいにより、ハンブルク滞在中は、大学学生寮に無料で宿泊することができた。それ以外は他都市での活動であったため、ホテルを利用した。通常、ホテルの予約は、当日であってもそれほど難しいことではないが、今回、ハノーファーを訪問した際はメッセ(見本市)期間と重なっていたため、市中心部はどこも満室で価格も高騰していた。今後、訪問地の大規模な催事には注意を払いたい。

2 研究活動について

今回の滞在中では、上述の研究テーマを実証的に追究するために、20世紀初頭のドイツ新教育運動において、都市型協同体学校設立の先駆的役割を果たしたベルトールド・オットー学校及び、その思想的・実践的影響を受けて設立されたマクデブルク市公的実験学校の授業実践記録、また、当時の学校教育局の未公開資料の収集活動に従事することを目的としていた。

ドイツ新教育運動では、既存の教科枠にとらわれない合科的・総合的な授業実践が盛んに展開されており、とりわけベルトールド・オットー学校はそのパイオニア的役割を果たしていた。しかし、これまでの日本、ドイツの研究においては、通史的、概説的な取り組みはなされているものの、一次資料に基づいた授業実践面からの考察はほとんどなされていない。そこで、今回の滞在中では、大学図書館、州立資料館を拠点に、ベルトールド・オットー学校で発行されていた学校機関誌等、授業実践記録に関する資料を中心に収集活動を行うこととした。以下、滞在中の具体的な活動内容について述べていく。

まず、到着後すぐに訪問したのが、ハンブルク大学教育学部附属図書館である。2004年(平成16年)3月現在、教育学部棟の全面建て替え工事のため他学部の校舎へ移転中であった。ここでは図書館利用カードを取得していなくても図書館の閲覧、コピーが可能であり、レファレンスで文献検索の相談にも応じてもらった。事前の検索によると、当図書館では、ベルトールド・オットー学校の機関誌の一部を所蔵しているはずであったので、その旨を伝えると、資料の劣化が激しいために、現在は閲覧不可とのことで、ハノーファー大学教育学部附属図書館を紹介された。

次に、ベルトールド・オットー学校の教師を中心に設立された「オットー協会」発行の回状(Rundschreiben)を閲覧するために、ハンブルクから電車で約5時間のところにあるグライフスヴァルト大学教育学部図書館を訪れた。古い雑誌資料は全て別棟の旧雑誌資料室に所蔵されてお

り、本来ならば事前申し込みが必要とのことであったが、即日の閲覧許可の便宜を図っていただいた。早速、紹介状を持って、旧雑誌資料室を訪れ、資料請求番号を提示すると、全く異なった資料が提示された。司書の方からは、文献検索目録の資料請求番号が誤っているために、資料を検索することができないとの回答があった。当該資料は、オットー学校の内実を知る上で非常に貴重なものであるため、その旨を説明し、滞在日程の制約から、本日の再検索を依頼した結果、司書の方が手作業で検索に当たって下さり、閉館直前に資料を入手することができた。突然の申し出に快く応じて下さった司書の方々に感謝申し上げたい。

今回の派遣で主要な訪問先となったのが、次に訪れたマクデブルク州立資料館(Magdeburg Stadtarchiv)である。Archivでは利用に際して、事前申し込みが必要であったので、渡独前に、研究に必要な資料とその使用目的を明記して利用許可を申請した。申し込み後、約10日で回答があり、訪問の日時が知らされた。ただし、日時の指定は閲覧室の空席状況によって、こちらの希望通りに許可されるとは限らない。今回も希望訪問日の3日後を指定されての訪問となった。到着後、研究テーマの概要とそのために必要とする資料について、書類に記入し、簡単な面談が行われた。訪問に合わせて予めいくつかの資料が準備されていたが、面談によって新たな資料が追加されることとなった。資料の閲覧に際して、パソコンの持ち込みは許可されたが、コピー、デジタルカメラ撮影は不可であった。1920年以前の地方新聞はマイクロフィルム化されており、マイクロフィルム資料のみコピーが許可された。Archivでは、コピーが禁止されている上に、開館時間が午前中3時間、午後2時間と短時間であったため、資料の収集は時間との闘いであった。しかし、滞在最終日に、担当の司書の方の取り計らいで、一部コピーを許可していただき、未公開の学校教育局内部資料をはじめ貴重な資料をほぼ入手することができた。滞在中、司書の方に何度も質問に伺い、繰り返し研究テーマを説明することで、研究内容と資料の関係についての理解が得られ、当初予定していた以上の資料にめぐり合うことができた。

最後の訪問先は、ハンブルク大学の図書館より紹介されたハノーファー大学教育学部附属図書館であった。これまでの訪問先では、ドイツの学生証および図書館利用カードを所持していなくても資料の閲覧が許可されていたので、同様にレファレンスに閲覧申請をすると、図書館利用カードなしには閲覧は許可できないと、入館を拒まれ

た。それでは、図書館利用カードを取得したいと申し出ると、ドイツでの住民登録票がなければ発行することはできないということであった。ハンブルク大学からの紹介も、そのような提携はないということで不首尾に終わった。訪問初日は八方塞の状態であったが、翌日もう一度訪問し、今度は図書館長との面会を求めることとした。面会を許可されると、今回の訪問目的、研究テーマと資料の重要性を訴え、資料の閲覧を許可していただけるよう懇望した。最終的には、パスポートとクレジットカードを身分証明のために預けることで、閲覧の許可を得ることができた。さらに、図書館長のご厚意で貴重書が所蔵されている書庫への入館とコピー機の利用まで許可され、短期間で約30年分の学校機関誌を全てコピーすることができた。その他、他大学ではコピー禁止であった古い資料についてもコピーが許可されたことは望外の幸運であった。以上の資料収集活動によって、ベルトールド・オットー学校の授業実践に関する記録・資料の大部分を入手することができた。

おわりに

今回、ハンブルク・サブセンターを拠点とする資料収集活動に従事させていただいたことによって、協同体学校を授業実践記録に基づいた教授学的視点から考察することが可能となり、今後の研究をすすめる上で非常に貴重な資料を得ることができた。このような機会を与えていただいたことに、改めて心より感謝の意を表わしたい。そして、今回入手した資料を十分に活用し、早い段階で研究成果をまとめるよう努めたい。

(2) 高梨 友宏

平成16年3月17日から27日まで、ハンブルク・サブセンターに3度目の出張をさせていただいた。今回の出張の主な目的は、平成16年9月にCOE研究事業の一環としてCチーム主催で開催を予定している国際シンポジウム「都市のフィクションと現実」の趣旨説明と、このシンポジウムへの協力依頼であった。具体的に言えば、当シンポジウムの趣旨を、ハンブルク大学における市大COE事業への研究協力統括者に説明して、そのための研究者派遣を承認していただき、他方、同シンポジウム企画担当者（芝原教授、山崎教授、田畑助教授および筆者）が希望する特定研究者にも同様の趣旨説明と来日依頼を行い、出張への承諾を取り付けるということであった。

3月17日にハンブルクに到着し、翌18日に早

速、ハンブルク大学東洋学部アジア・アフリカ研究所内にあるサブセンターに向かった。筆者としては前回、平成14年の暮れから平成15年2月末まで、最初のハンブルク・サブセンター派遣者として2ヶ月間滞在させていただいたので、約1年ぶりの再訪であった。異国の地とはいえ、2ヶ月も滞在するとそれなりの愛着やなじみも出てくるもので、大学に最寄りのダムトア駅周辺やハンブルク中央駅界隈の、かつてしばしば買い物や食事等で世話になった店の見覚えのある店員の顔に、嬉しさや懐かしさが自ずとこみ上げた。

さて、本学COE事業への先方大学研究協力者の多くは、メールによる事前の連絡がうまく取れなかったことからもおおよそ予想はついていたが、案の定、休暇その他の理由で不在であった。そこでとりあえず、秘書のベーレンス氏に関係者の休暇日程や来校日、自宅電話番号やメールアドレス等連絡先をお尋ねした。その結果、早くとも22日までは目的の関係者との面談ができないことが判明したので、出張計画には盛り込まなかったことではあるが、急遽予定を立て直し、19日から22日まで、ベルリン、ライプツィヒ、ヴァイマルの諸都市を訪問、著名な博物館、教会等を見聞して回った。22日夜にハンブルクに戻り、25日までにシンポジウムに関わる所期の目的を果たし、26日朝、日本への帰途についた。

1 国際シンポジウムの打ち合わせ

では、本題に入りたい。ハンブルク大学では、海外出張から帰国されたばかりの同大学東洋学部アジア・アフリカ研究所日本学研究室の宮崎講師に連絡をとり、当時休暇のためにご不在だった同研究所長で本学COE研究事業のハンブルク大における研究協力者のオーガナイザーである、ローラント・シュナイダー教授の代行をおつとめいただくようお願いした。シンポジウムの趣旨については、3月23日にサブセンターで宮崎講師にお目にかかって、詳しく説明させていただいた。宮崎講師には、こちらからの唐突な要請にもかかわらず早く聞き入れてくださるなど、今回も公私に亘って大変お世話になった。この場を借りてお礼申し上げたい。

一方、われわれシンポジウムの企画者が当初より来日を切望していた同大学日本学研究室のミリアム・ローデ助教授には、3月20日、ベルリンからの電話でようやく連絡がついた。ローデ助教授は、日独間の比較政治学および比較経済学をご専門とする研究者であるが、両国の文化事象にも幅広い関心をお持ちで、とりわけ映画に造詣が深いとうかがっている。ローデ助教授は、平成14年12月にサブセンター開設のお願いとご挨拶を

目的としてハンブルク大学を訪れた市大COE関係者訪問団(筆者も当時そのメンバーの一人として随行させていただいた)のために先方が用意してくださった宴席に臨席され、やはり映画に深い関心をお持ちのCチーム事業推進担当者・芝原宏治教授と、映画談義に花を咲かせていらしかったことは筆者の記憶にも新しい。このときの出会いが、今度のシンポジウムで映画に関するセッションを設けてローデ助教授を招聘しようという話へと展開したのである。ローデ助教授はまた、2003(平成15)年6月にハンブルク大学で開催された「大阪市立大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム“都市文化創造のための人文科学的研究”ハンブルク・サブセンター開設記念共同研究会」でもスピーカーの一人として研究交流に応じてくださっていた。今回の筆者の出張期間中、本来ならばお目にかかってシンポジウムの趣旨説明と出張依頼を行うべきであったが、第一子のご出産を数日後に控えておられる(実際、筆者が電話をした2日後に元気な赤ちゃんをご出産になったことを後日ベーレンス氏から知らされた)等の理由で、残念ながら直接お目にかかることはかなわなかった。もっとも、ベーレンス氏に電話番号をお教えいただき、そのような状況におられたローデ助教授と電話でお話できたこと自体、タイミングからして、むしろ幸運であった。ところで、シンポジウム開催はそれから半年後になるとはいえ、生後6ヶ月の乳幼児がいるような状況の中、来日・講演をお引き受けいただけるかどうか、筆者を含め、日本のシンポジウム企画者には相当に危惧されるところではあったが、「その点は、夫が協力してくれるでしょうし、育児のストレスからもきっと解放されるでしょうから」と、こちらが拍子抜けするほど快くご承諾くださって、電話口で大いに胸をなで下ろした次第である。ローデ助教授を本学文学研究科に客員研究員として招聘する(受け入れ担当者は田畑雅英助教授)ための調書は7月2日の教授会で無事承認された。

なお、ハンブルク・サブセンターへのこのたびの出張期間中、多くの先方スタッフの不在にも拘わらず、日本学研究室長のマンフレート・ポール教授に偶然ご挨拶できたのも幸いであった。今度のシンポジウム以後のCOE共同研究への協力を依頼することができ、またポール教授自身が、この仕事に大きな関心を示されたからである。ポール教授との関係が、本学とハンブルク大学との間のさらなる研究協力体制を構築するための礎石の一つとなることを願って止まない。

9月のシンポジウムにかかる打ち合わせの成果については以上の通りである。

2 ベルリン、ライプツィヒにおける「都市文化」体験と雑感

ところで、さきに述べたように、打ち合わせの合間に予定を変更していくつかのドイツ諸都市を回った。すなわち、3月19日から21日朝までベルリンに、また21日朝から22日朝までライプツィヒに滞在し、22日、ハンブルクへ戻る途中、ヴァイマルに数時間立ち寄った。それぞれの都市で、特色ある都市文化の諸局面を見聞できたことは、本COE事業にかかわる者としても、美学を専攻する者としても、筆者にとっては大きな収穫であった。やや私的な内容にかかわる真なきにしもあらずではあるが、次に、出張中のハンブルク以外の都市巡りの、都市文化にかかわる限りの内容について、雑感を交えつつ簡単に報告させていただきたい。

まず、ベルリンでは、「近代美術館」および「ユダヤ博物館」を訪問した。

近代美術館では、当時大きな話題を呼んでいたニューヨーク近代美術館(MOMA)の傑作展(開館時間に合わせて出かけたにもかかわらず、すでに2時間待ちの長蛇の列であった。日本では珍しくもない光景であるが、ドイツの美術館では長蛇——ちなみにドイツ語でもこれをdie lange Schlange[“長蛇”の意]という——は相当な奇観である。この一事からも、この展覧会がベルリン市民ひいてはドイツ人一般にとって如何に強い関心を惹く企画であったかが知られるところである)を観ることができた。現代美術の教科書に必ずその写真が載るようなニューヨークの有名作の数々に、まさかベルリンで出会うとは思わなかったが、しばしば理念先行的と括られる現代美術に直に対面してみると、それにもかかわらずそれらがなお直接体験に訴える感性的価値質の契機を豊富に有していることに改めて気づかされ、筆者自身の現代美術観に大きな変更が加えられる結果となった。そもそも、“美”に遠く、“難解”と受け取られがちな現代美術に、老若男女を問わずこれほど多くの関心が寄せられていることは、ある意味で驚きであったが、思えば、過去の芸術的伝統を自ら断ち切り、近代都市の大衆文化の生成や、都市固有のメディアに媒介された知覚と不可分の関係を有する現代美術が、しばしば“近未来的”とも形容される大都市ベルリンには、実はいかにも似つかわしい文化事象であったと見ることもできるだろう。そのように考えれば、同展覧会がベルリンという都市で大方の関心と呼んだことも、決して驚くには値しないことになる。

また同地では、現在、世界的な注目を集めている建築家、ダニエル・リベスキントの設計になる

「ユダヤ博物館」の建築空間を実地に体験することができた。このことも筆者にとっては大きな成果であった。かつてベルリンに住まいし活躍した著名なユダヤ系文化人たちの旧い居所を互いに結んだ線によって地図上に浮かび上がるいびつな“ユダヤの星”の一角に建設された同博物館は、入り口も出口もない建物で(隣の建物で入館手続きをとり、地下の通路を通過して入館する)、複雑に入り組んだ内部構造もさることながら、かぎ裂き傷のような形状をした採光窓が縦横に走る痛々しげな外壁、入館者の平衡感覚を狂わせる傾いた廊下、展示品のない空虚な展示室(もちろん、展示品のある部屋もある)、被強制収容者の行き場のない不安を疑似体験させるような闇の空間など、博物館に対する既成のイメージをことごとくうち砕く諸要素が渾然と一体をなしている。この異様な風貌と構造を持つ建物自体が、ユダヤ人が被った迫害の歴史を記憶にとどめ、しかも、訪れる者にこの記憶の仮象を身体的に追体験させるのである。上述のMOMA展への関心が、歴史からの断絶の性格を示唆する、現代の大都市ベルリンの典型的な一面と見られるならば、「ユダヤ博物館」は、その展示品によってのみならず建物自体によって歴史への——それが負の歴史であるとしても——固執を示す、都市ベルリンのもう一つの側面と見ることができる。過去から未来へ、時の経過の中に実存する都市は、自己の歴史に対してどのような態度をとるべきか。ベルリンで経験した二つの対照的な事象は、文化の形で都市そのものが己の歴史に対してとる、精算と固執という二つの関わり方を示すものであり、都市文化の持つさまざまな対照性格の一つの表示であったと思う。

さて、J.S.バッハにゆかりの深い旧東独を代表する都市ライプツィヒを、ちょうど彼の誕生日である3月21日朝に訪問することができたのはまさに僥倖であった。中央駅から早速、バッハがカントル(聖歌隊長)を長らくつとめた聖トーマス教会に向かい、そこでバッハの誕生日を記念する特別の主日礼拝に参加、同日夕刻には、世界的ヴァイオリニスト、ヴィクトリア・ムローヴァを招いて同教会で催されたチャリティ・コンサートにも幸い臨席することができた。バッハの息吹の感じられるトーマス教会でムローヴァが奏でた数々のバッハの名曲のうち、とりわけ「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ」第2番中“シャコンヌ”は、近年、古楽器奏法を自らの演奏に取り入れるべく研究しているとされるムローヴァの端正でしなやかな演奏様式のうちに見事に体现されていた。石造りの会堂の内壁に反響する凜とした弦の響きは、満席の会堂を文字通

り至福の時で満たしてくれるものであった。ステンドグラスの一角を占めるバッハのポートレートが、こころなしか慈しみ深げに目を細めて会堂の出来事を見守っているように見えた。

共同体の中心としてかつて生き生きした社会統合機能を果たしてきたヨーロッパのキリスト教会は、その機能を近代都市の合理的システムに譲り、近代化の過程のなかで社会の共同性の基盤も多元化したと言われる。実際その通りであろう。しかしこのような礼拝や教会コンサートが、都市の人間を結ぶ紐帯の一つとして今なお生き生きと働いていることもまた否定できない事実である。ベルリンに比べてライプツィヒは規模も小さく、一地方都市の域を出ないが、むしろそうした小規模な地方都市であるがゆえにこそ、そこに近代化の最前線を走る大都市にはない、かといって現代の都市文化として、決して過去化し去ることのない、伝統そのものの生ける現前、旧くかつアクチュアルな都市文化の馥郁たる薫りをたどることができるのであろう。

ヴァイマルについては、すでに与えられた紙幅を超過したので、別の機会に記したい。

今回の短いハンブルク出張では、ハンブルク大学での所期の目的の他に、筆者にとっては大変有意義な経験をさせていただいた。サブセンター報告としてはバランスを欠く内容となったが、ともかくこのような出張の機会を与えてくださった本研究科に感謝し、これらの経験を今後のCOE研究や筆者自身の研究テーマの糧として活用させていただくことを約束して、筆を擱きたい。

ロンドン・サブセンターについて

(1) 栄原 永遠男

サブセンターの整備

①ロンドン・サブセンターは、平成15年2月22日に、ロンドン市の27 Lords View, St.John's Wood Road に開設した。よい研究環境、利便性、居住性のよさ、またなにより安全性などの諸点を慎重に考慮して設置したものである。以来、少なからぬ教員、COE研究員がこの施設を利用して多くの研究成果をあげてきており、COE研究員に対する教育効果も大きいものがあつた。

しかし、教員は授業の、COE研究員は非常勤講師としての勤務や授業のため、その利用は夏季・冬季・春季の休業期間中にかたよりがちで

あった。一方、契約は年間で結ばれており、それにもなつて税金や光熱関係の基本料金もかかってくる。このため、平成15年度の使用実績を見ると、対費用効果において問題があることが懸念されるにいたつた。

②そこで、以下のような方策をとることとした。

- a. サブセンターの研究機能と宿泊機能を分離する。
- b. 研究機能を維持するために、ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）内にスペースを確保する。
- c. これまでのサブセンターは、契約更新の期限である平成16年2月20日をもって解約する。宿泊機能は、適宜ホテル等で確保する。

③この方策を実現するために、平成16年2月16～20日の間、栄原・芝原宏治教授・田中一彦助教授の3名がロンドンに出張した。ロンドンにおける事態の経過は、以下の通りである。

- a. 2月16日（月）ロンドン着、サブセンターの下見、家具・器材等の点検。
- b. 2月17日（火）サブセンターにて日本に送付するものと廃棄物とを仕分ける。英国日通引越センターによる荷造りに立ち会う。必要書類を作成。
- c. 2月18日（水）ロンドン大学SOASのアンドリュー・ガーストル教授と懇談。続いて、コリン・バンディ学長と会見。出席者は、バンディ学長、ガーストル教授、我々3名である。我々は、(a)我々のCOEについて説明、(b)今後の両校の共同研究について意見交換、(c)SOASの建物内にサブセンターを確保したいむねの希望を表明した。これに対してバンディ学長は、(a)は了承、(b)について同意、(c)については対応を考える、と表明した。
- d. 2月19日（木）サブセンターにおいて詳細なインベントリーチェックを受ける。公共料金・光熱費等の支払いについて最終点検。鍵を渡して契約解除完了。
- e. 同日、ガーストル教授を介して、バンディ学長から、SOAS内の1室を東京外国語大学と共同使用してはどうかとの提案を受ける。帰途につく。
- f. 2月20日（金）帰国。

東京外国語大学との交渉

④帰国後、ただちに東京外国語大学のCOEと連絡をとり、2月24日（火）15時～16時に、同大学府中キャンパスのCOE拠点本部（研究講義棟3階）にて、第1回目の相談を行なった。出席は、藤井毅教授（拠点リーダー）、粟屋利江助教授（リ

エゾンオフィス・国際会議担当）、足立享祐（ロンドン担当大学院学生）（以上、東京外国語大学側）、大阪市立大学側は芝原宏治教授と栄原であった。

話し合いの結果、つぎの4点で合意した（東京外国語大学側も2月25日の総括班会議で確認済み）。

確認事項

1. SOASの349号室を共同使用する点は合意した。具体的な使用の仕方、使用者については、今後、両大学間で相談して、覚書を取り交わす。
2. 部屋代（年1550ポンド）は、両大学で折半する。電話代の支払いについては、今後相談する。
3. 共同使用の開始は、大阪市立大学は平成16年度4月1日からを希望した。これに対して東京外国語大学は、今後2週間以内にSOASと大阪市立大学との合意と文書の交換、東京外国語大学と大阪市立大学との間の覚書の交換が成立すること前提として、これに合意した。これらの条件が整わない場合には、共同使用の開始は平成16年4月1日以降にずれ込む。
4. 部屋の共同使用だけにとどまらず、両大学間の共同研究の可能性についても、今後相談していく。

⑤以上の内容は、2月26日の第18回常任委員会（臨時）で報告し、了承を得た。

⑥上記合意事項3により、SOASとの間で、至急349号室の共同使用に関する合意文書を交換する必要が生じた。

このため、ガーストル教授とただちに連絡を取り、事情を説明して、SOAS側の対応を進めてもらうように依頼した。

ロンドン大学東洋アフリカ学院との交渉

また、3月4日（木）～8日（月）に阪口弘之教授、山崎弘行教授、杉井正史助教授の3人にロンドン大学に出張してもらい、合意文書の締結と共同使用にあたっての諸条件等について交渉していただくこととなった。

その結果、3月8日付で以下の文書を交換することができた。この出張の詳細は、杉井助教授の報告を参照されたい。

Hire of Room 349 at SOAS

Further to negotiations between SOAS, Tokyo University of Foreign Studies and Osaka City University, I am delighted to set

out below the terms under which you will be renting Room 349 on a shared basis with TUFs from the School:

1. The period of the rental will be from 1 April 2004 to 21 March 2007.
2. An annual rent of £ 775 will be paid by OCU, invoice to be issued in April of each year, rental to include furniture and cleaning to a standard comparable with similar accommodation in the School.
3. OCU will pay all charges in connection with telephone/fax and photocopying to be invoiced on a regular basis.
4. OCU will cover the cost of leasing a telephone/fax through the IT Department.

It should be noted that the School can not offer vehicle parking facilities. Precinct parking is under the control of the University of London and only permanent staff are permitted to leave their vehicles in the precinct area.

As a tenant occupying space within the School you, and anybody using the office, would be expected to adhere to the School's regulations regarding Health and Safety and security.

I should be most grateful if you could sign and date a copy of this agreement indicating that you are happy with the terms and conditions indicated above.

If you have any queries with regard to any of above, please do not hesitate to contact Mrs. Deborah Rhys.

Signed by Professor P.Robb

Date 8/3/04

Signed by Professor H.Sakaguchi [Osaka City University]

Date 8/3/04

東京外国語大学との覚書交換

他方、大阪市立大学と東京外国語大学との覚書についても、大阪市立大学側で作成した文案について、両校で意見交換しながら検討を進めた。

⑦3月9日（火）に第21回センター会議が開催され、これまでの経過、大阪市立大学とロンドン大学SOASとのあいだの覚書と、大阪市立大学と東京外国語大学間の覚書案が承認された。

⑧これを受けて、栄原はただちに東京外国語大学に向かい、第2回目の相談に望んだ。時間は、3月9日18時～20時、場所は前回と同じ。出席者

は、東京外国語大学側出席者は前回と同じ。大阪市立大学側は栄原。相談の内容は以下の通り。

1. 大阪市立大学から、第1回相談以後の経過と、上記合意事項3にもとづいて、ロンドン大学SOASと覚書を交換したことを報告。東京外国語大学はこれを確認した。
2. 大阪市立大学と東京外国語大学との間の覚書について、文案の検討を行い、下記の内容で合意した。
3. 両大学間の覚書は、両大学それぞれで組織決定すれば、3月9日付けで発効することを確認した（大阪市立大学側は3月22日第22回センター会議にて承認、東京外国語大学側は3月31日の総括班会議にて承認）。
4. 共同使用にともなう諸問題について意見交換をした。

ロンドン大学SOASの349号室の共同利用に関する覚書

平成16（2004）年3月9日

東京外国語大学

21世紀COEプログラム

「史資料ハブ地域文化研究拠点」

大阪市立大学

21世紀COEプログラム

「都市文化研究センター」

東京外国語大学21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」（以下、甲）と大阪市立大学21世紀COEプログラム「都市文化研究センター」（以下、乙）は、ロンドン大学SOAS（以下、丙）の349号室の共同利用につき、以下の点を確認する。

1. 甲は349号室に「ロンドン・リエゾンオフィス」を置く。乙は349号室に「ロンドン・サブセンター」を置く。
2. 乙の利用は、平成16（2004）年4月1日から開始する。
3. 甲と乙は349号室の利用について、平等な権限を持つ。
4. 甲と乙は349号室の賃借料を、均等に負担する。甲と乙はそれぞれが、丙と合意する賃借契約に従って、賃借料を納入する。
5. 甲と乙は349号室の電話・ファクス・電子機器等に関する使用料について、丙の指示に従って、各自がそれぞれ丙に支払う。
6. 甲または乙の一方の過失により生じた損害については、他方の利用の妨げとならないよう、過失を犯した側が責任をもって、すみやかに弁済ないし処理する。甲乙いずれの過失か特定できない場合は、甲と乙が均等に責任を負う。

7. 甲または乙が349号室の利用につき、丙と新たな覚書を交わす場合には、あらかじめその旨を乙または甲に伝え、その了解を得るものとする。
8. 甲と乙は349号室の具体的な利用について、協議して進める。必要に応じて、細則を別途定めることもある。
9. 甲と乙は349号室を拠点として共同研究を推進することについて、必要に応じて協議する。
10. 甲または乙から本覚書の内容の変更を申し出た場合、両者で協議して合意した点について変更する。
11. 本覚書は平成19（2007）年3月31日まで有効とする。ただし、延長を妨げない。甲または乙から文書による解消の申し出があった場合は、両者で協議して合意すれば、申し出のあった年度の末をもって終了するものとする。

付則1 本覚書は平成16（2004）年3月9日から有効とする。

- 2 甲または乙は、349号室の使用者氏名とその身分、使用日程を事前に連絡し合う。双方の使用予定者の合計が、同号室の許容限度を超える場合は、協議して適宜調整する。

東京外国語大学COEプログラム
 史資料ハブ地域文化研究拠点
 拠点リーダー 藤井 毅
 大阪市立大学COEプログラム
 都市文化研究センター
 拠点リーダー 阪口弘之

⑨3月22日（月）の第22回センター会議にて、以上の諸点が承認された。

サブセンターの利用

⑩4月30日～5月5日に、筒井香代子氏（COE研究員、英語英米文学専修）がロンドンサブセンターを利用し、環境整備に取り組んだ。上記覚書付則2にしたがって、事前に東京外国語大学側にその旨を通知した。

⑪6月22日～7月20日には、同様の手続きを経て市川美香子教授が利用した。

(2) 杉井 正史

阪口弘之教授、山崎弘行教授、杉井の三人は、平成16年3月4日にロンドンに到着し、3月9日日本に帰国した。出張者の阪口教授は拠点リー

ダー、山崎教授、杉井はCOE事業推進協力者である。本出張の目的は、ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）内の一室（349号室）の共同使用に関して東京外国語大学と事前調整し、SOASと合意文書を締結し、使用法について交渉することであった。この6日間の出張について報告したい。

3月4日

ロンドン到着後、20時から、東京外国語大学の足立享祐氏（ロンドン大学担当大学院学生）と会談した。まず、足立氏の案内で共同で使用する予定の349号室を視察。その後ホテルで会談を続け、以下の点を確認した。

1. 平成16年1月～3月分は、東京外国語大学が支払う。
2. 4月以降、両大学が部屋を共同使用し賃借料は折半にする。
3. これには、大阪市立大学とSOASとの協定（合意文書）締結が前提となる。

足立氏は、また大阪市立大学の賃借料の支払い方法および協定相手の組織について、助言してくれた。さらに足立氏は部屋について以下の技術的な問題があることを指摘した。

1. 机の引き出しの鍵の問題
2. 電話やパソコン接続の問題（支払い方法、電話やIPアドレスやメールアドレスの交付手続き）
3. コピー紙などの消耗品費の負担方法
4. 両校不在時の管理方法
5. 入校時のバスの交付手続き

足立氏との会見後、日本の大阪市立大学のCOE事務局に会見内容をEメールで報告した。

3月5日

11時より、SOASのシニア・コモンズ・ルームで、349号室使用のための合意文書締結の交渉をした。同席者は大阪市立大学の三人、SOASのアンドリュー・ガーストル教授、東京外国語大学足立氏、SOAS事務担当のデボラ・リース氏であった。大阪市立大学側で用意していた案でSOASと合意した。特記すべき点は、以下の点であった。

1. 協定の相手は日本研究センター。
2. 電話、ファックスについては東京外国語大学と同じくリースにする。（料金は自動的に大阪市立大学に請求される）

3. 電話線の差込口は現在東京外国大学用しかないが、増設工事を行う。
4. コンピューター接続についても、工事を行いSOASの学内LANに接続して、東京外国語大学と同時使用ができるようにする。
5. 大阪市立大学の使用が可能になるのは、4月1日以降。
6. その他、入校の時のパスの発行やコピーカードの発行については本合意文書に基づいてSOASが準備して様式を整える。

合意文書案に双方が同意したが、署名責任者のピーター・ロブ教授が不在であったため、3月5日は署名できなかった。3月8日にロブ教授の署名した合意文書をリース氏が持参して、それに阪口教授が署名することにした。

3月7日

元大阪市立大学院生のバーバラ・クロス氏と会おうとしたが会えず、阪口教授が電話で連絡を取り、今後のさまざまな面での援助を依頼した。ロンドン大学東洋アフリカ学院派遣中の渡部美穂子氏（COE研究員、心理学専修）と会い、明日（3月8日）SOAS日本研究センター長のジョン・ブリン教授と会見する手配を依頼した。

3月8日

11時、ロンドン大学東洋アフリカ学院のシニア・コモンズ・ルームで、ガーストル教授の立会いのもとで、デボラ・リース氏の持ってきた合意文書（ピーター・ロブ教授署名済み）に阪口教授が署名し、合意文書の締結を完了した。その場で大阪市立大学の都市文化センターへファックスで交換文書を送った。文書は阪口教授が日本へ持って帰った。電話、LANの差込口の工事は4月1日までに完成の見込みである。

署名の後、ガーストル教授と今後の学術交流について協議した。その後、日本研究センター長のブリン教授を訪問した。大阪市立大学の渡部氏も同席した。大阪市立大学側は、今後の共同研究のために、ブリン教授の来日を要請した。ブリン教授はそれを快諾した。その後、ロンドン大学東洋アフリカ学院のスティーン・ドッド博士と会談した。ドッド博士が本年の9月から日本を訪問する可能性があるとの情報を得た。

18時15分、JAL422便でヒースロー空港から帰国の途についた。

3月9日

15時20分、関西国際空港へ到着、帰国した。
今回の訪問の大きな目的であったロンドン大

学東洋アフリカ学院349号室の使用に関する合意文書の締結により、ロンドン大学東洋アフリカ学院内でのサブセンター開設は果たした。IT関係の施設の整備の目途もついたが、鍵の問題やIT関係施設の申請や接続など、技術的な問題の解決は今後の課題になるだろう。

(3)

筒井 香代子

筒井の派遣期間は本年4月29日から5月5日までである。ここでは、この度、新たな活動拠点となったロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）349号室の整備状況、及び今年9月に開催されるCOE国際シンポジウム「都市のフィクションと現実」開催のための下交渉、以上2点に関する報告を行いたい。

サブセンターとなるロンドン大学内の研究室には、筒井が渡英するまでに、大阪市立大学側が使用するための電話の差込口工事が完了し、電話が設置されている予定であった。実際訪問する（なお、研究室にはドアにある暗証番号を押して入室する）と、工事は完成しており、差込口のところに大阪市立大学専用であることを示す紙が、工事完成の日付（2004年3月3日となっていた）及びダイヤル番号を記して貼り付けてあったが、当の電話は設置されてはいなかった。ロンドン大学SOASのガーストル教授にその旨を伝えたと、教授自ら、後日工事関係者に事情を聞いておくので心配はいらないとのことであった。次回関係者が訪れる際には、設置されているはずである。

研究室でのメール送受信は、大学内でユーザーネーム及びパスワード取得により可能である。インターネットエクスプローラーから、<http://staffview.soas.ac.uk>のHPを開き、ユーザーネームとパスワードでログインする。なお使用期間は、利用者の滞在期間に限られる。またユーザーネームとパスワード取得のため、渡英前の連絡と正式書類郵送が必要である。

正式書類とは、英文で、利用者の氏名、滞在期間、及び滞在目的を簡潔に記したものであり、機関の長である阪口教授（拠点リーダー）の推薦状という形式で、ガーストル教授の元へ郵送しなくてはならない。SOAS図書館カードを取得する際も同様の手続きを踏む必要がある。ただし短期滞在中のメール送受信に関しては、このような手続きを踏まずとも、日本で所有しているアドレスを利用したほうが、都合がよいであろう。

筒井の場合、以上の手続きなしに訪問したが初めてであったため、ガーストル教授による特別な

計らいで、ユーザーネームとパスワードを希望し、当日取得出来た。

なお、机に付属の鍵であるが、二つある引き出しの一方にのみどうにか符号したが、どうも机が古いのか使い勝手が悪く、鍵がうまくかからない状態であった。

次に9月開催のシンポジウム「都市のフィクションと現実」における発表者としての参加を、スティーヴン・ドッド博士とアラン・カミングス氏に依頼することとなった。ドッド博士は、去年もシンポジウムにスピーカーとして参加したこと、そして博士の研究とシンポジウムのテーマとが一致するものであったため、今回の参加を依頼したが、カミングス氏については、ガーストル教授の紹介により参加してもらえ運びとなった。なお、ドッド博士には国木田独歩、またカミングス氏には河竹黙阿弥の作品をそれぞれ都市との関連で論じてもらう予定である。両氏には快諾してもらい、本当に感謝している。

また余談ではあるが、大英図書館の図書カードは、利用者の所属する機関の長による身分証明書および、預金残高証明書のような現住所の証明が可能な書類を提出すれば、即日取得可能である。ただしいずれも英文による証明書でなくてはならない。取得しておくくと便利であるのでぜひ参照されたい。

以上、短期間であったが、SOASの関係者の方々、特にガーストル教授のご配慮のおかげで実りある滞在となった。心より感謝の意を表したい。

ホームページ委員会

水内 俊雄

ホームページの掲載情報が、本COEの活動の窓口であるとともに、その活動の評価にもつながっていることを、ますます実感している。平成15年5月に大改造を加えたが、その後もこまごま体裁上の変更を加えた。ホームページの主な機能である、リアルタイムでの情報の提供と、データベースとしての情報のストックの所有という意味で、どちらかという、直近の情報提示は、日本語のサイトのほうでは、ほぼ順調に開示してきたが、一昨年度、昨年度のさまざまな出版物や講演会、研究会の情報蓄積はいくぶん遅れ気味であった。こうした業績や出版物の提示が、体裁上もうまくいっていなかった。平成16年6月の改造で、こうした業績や、出版物、そしてデータベー

スのわかりやすい表示がトップページにくるように変更し、これで本COEのアウトプットが、わかりやすくホームページ閲覧者に提示できるようになった。そして、平成16年7月には、トップページの衣替えをおこなった。

懸案の英語サイトについても、バンコクサブセンターの昨年度の英語報告書をアップしたこと、各研究員の出版物や業績で、国際的な媒体、あるいは国際学会で行われたものについては、中国語、フランス語やドイツ語によるものであっても、すべて英語で表記し、これまた日本語に準じて改造を加えた英語サイトにアップした。遅まきながら、国内で行われる通常の研究会以外の、海外のサブセンターの活動や、研究員の業績開示については、英語でもみられるようにしている。

データベースについては、大阪の歴史資料についての文献一覧を当面エクセルで見られるようにしており、今後しばらくはこのような形での、歴史資料の一覧が順次アップされる予定である。デジタルアーカイブを本格的に始動させるために、重点研究でそろえたマイクロフィルムの電子化の装置で、貴重な大阪、都市研究にかかわる資料の電子化を行うことにした。そのために5月と6月の2回、業者にプレゼンをかねた説明会を開催した。

いつもながら、後方支援スタッフに感謝する次第である。

文学研究科叢書編集委員会

阪口 弘之

1) 平成15年度の活動記録（続）

平成16年

2月20日 第5回委員会

議題1 叢書第2巻編集状況報告（カバーデザイン等検討）

議題2 今後の刊行計画

3月15日 清文堂と叢書第2巻出版契約締結（阪口委員長）

3月18日 第6回委員会

議題1 叢書第2巻編集状況報告（内容見本確認）

議題2 次年度企画について

COE国際シンポジウム「東アジア近世都市における社会的結合」を第一候補に調整

3月31日 叢書第2巻『都市の異文化交流《大阪から世界へ》』完成、一部納品

2) 平成16年度の活動記録

- 4月5日 叢書第2巻内容見本完成
- 4月6日 第7回委員会
 - 議題1 叢書第2巻の配布先決定
 - 議題2 叢書第3巻の企画について
COE国際シンポジウム「東アジア近世都市における社会的結合」の成果につき清文堂から刊行する方向で調整
 - 議題3 平成16年度委員について検討
- 4月13日 叢書第2巻納本完了

『都市文化研究』編集委員会

仁木 宏

1) 平成16年度委員

高梨友宏・土屋貴志(哲学), 仁木宏(日本史学, 委員長), 川邊光一(心理学), 岩本真理・大岩本幸次(中国語中国文学), イアン・リチャーズ(英語英米文学)

※木原俊行(教育学)が退任し, 後任に川邊光一が就いた。

※この他, 編集委員会(会議)には, 荒平みほ(編集補佐, COE事務局)が出席している。

2) 平成15年度末から平成16年度(途中)までの主な活動

(『都市文化研究』第3号掲載のニュース以降の活動)

平成15年度

『都市文化研究』第3号の刊行にむけて, 編集主任(木原)を中心に活動した。論文付属の表を実際に組んでみると予想以上にページ数が多くなるなどして全体のボリュームがふくらんだ。ワープロ・ソフトごとの機能のちがいが, 外字処理などの問題点が明らかになった。

平成16年度

編集作業の一連のシステムがおおよそ確立し, 編集活動を安定して遂行できるようになった。

[編集委員会の組織]

各チームの論文投稿希望やニュースの執筆分担を調査したりするチーム担当委員は, A=大岩本, B=土屋(木原から交代), C=高梨である。

COE事務局の組織替えにともない, 編集補佐が出口から荒平に替わった。引きつづき執筆者情報の整理や原稿の受け渡しなどの業務を担ってもらっている。

[査読体制]

投稿された論文については, 原則として, 第1次・第2次の二度の査読を課すことにしている。第1次査読では, 1本につき, 編集委員1名, 非編集委員(文学研究科教員)1名の2名体制をとった。第2次査読は編集委員各1名が担当した。

査読にあたっては, 査読表を活用し, 公正かつ正確な査読を期した。なお, 査読表をホームページ上に公開している。

[執筆の手引]の作成]

第3号までの問題点に鑑み, 数字・句読点の原則や, ニュース原稿中の大学・人名の正式名称などを統一するため, 「執筆の手引」を作成し, 執筆者に参考にしてもらった。

[校正手順の改訂]

校正作業の正確さと機能向上をめざす。第4号では, 初校を執筆者に返却する前に, 編集主任を中心に大学院生にも手伝ってもらい, 集中校正をおこなうことにした。

3) 活動記録(平成16年7月2日現在)

(『都市文化研究』第3号掲載のニュース以降の活動)

平成16年

- 3月9日 『都市文化研究』第3号の集中校正
- 4月8日 第3号納品
- 5月12日 『都市文化研究』第4号投稿論文の第1次締切(論文10本の投稿あり)
- 5月14日 第16回編集委員会
 - (1) 投稿論文の第1次査読者の決定
 - (2) 第4号の刊行スケジュールの確認
- 6月4日 第17回編集委員会
 - (1) 投稿論文の第1次査読の結果決定→執筆者に書き直し指示
 - (2) 「執筆の手引」の検討
- 6月10日 特別寄稿・研究報告の締切
- 6月18日 投稿論文の第2次締切(論文9本の投稿あり)
- 7月2日 第18回編集委員会
 - (1) 投稿論文の第2次査読の結果決定
 - (2) 第5号のスケジュールの確認
編集主任は大岩本委員
- 同日 ニュース原稿の締切